



貝原先生歲時增選  
鳥飼洞齋翁編述

改正月令  
博物筌 全部

此書甲子年彫刻スレトモ  
州稿駁雜ニシテ且傳寫ノ誤  
少ナカラス故ニ此度左ニ録スル  
諸先生技圖ヲ經テ再訂テ  
ニ改正ノ二字ヲ蒙ラシム此書  
正シクナリタルヲ好タシテ佳作  
ヲ贈給ハルヲ次ニ記ス

章

一年三百六十日日  
日無邦無故實時令  
娛遊及國風偉哉抄  
録収細帙

筱應道題

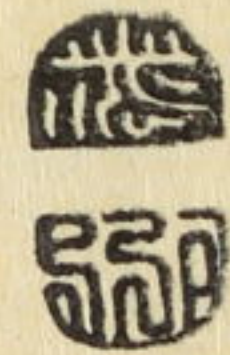
〽

採觚箋藝細  
工夫業就堪  
供詞客厨時  
令天文盤托



出處魚州木  
帙分區蔡色  
它又帳中秘  
張說平生掌  
裏珠寄語風  
流多執子休  
為博物小人  
儒

南豐題



日初月為生  
事浩瀾古性  
正今備哉燦  
爛

恒樂



卷之五  
一  
二  
三  
四  
五  
六  
七  
八  
九  
十

水滸軒

道孝

世のあつたるは  
まじくばらぬは  
かみふくまをのふりて

水と見よりのあはら

とみ宙より

とらふらふ

そのらふ

華落  
海内齋齋雅

世のあつたるは  
まじくばらぬは  
かみふくまをのふりて

月や月やを  
井眉

のらふらふ

### ○俳諧大意並口傳

一此書の詮とどり処の歳時月令の正節と明らふに改不曆○二十四節禮記之月令と筆小記一草木花実の時日と不差記と詩歌連俳の季節と定る月の相違せり  
のちる故不各傍小月々用ゆる  
印を委しとあると

一連歌俳諧者流小季と定め節と究むるとい原素懐紙一順の見渡しの為小二條家ふるくとの分置れ小後普光園機政新式と著し給ひ後常恩寺太閤追かしたるい肖相老人今案と加るられて其式既定よりたふ  
バ和歌小年内立春ハ春るれども連俳ハ冬と守杜若ハ和歌ハ春るれども連俳ハ初夏と守○牡丹ハ春ふも出夏もせりとのあり

連非ハ初夏の景物と定既ハ  
宗砌法師の句ハ

春暖く及る花のさかぬやぬき草  
と断り居るも深き詠有詩と

歌ハ二章一首のみのく連歌ハ  
百句はねらるる名多し誹諧又

式を連歌ハ擬を然るハ夏冬  
のこころハ景物少く懐紙乃見

淺くはろしかりすよめて古今集  
の巻頭ハ年際立春かれと連歌

ハ冬と定雪月花の三ハ夏ハ及  
す守故ハ燕子花牡丹をハ夏

とん中々私ハささむる事ハ  
らハハこそをハ翁も季寄

の楸ハ御傘をまハ草ハ過  
とハ申されしとハ本文の内秘授

ハ尖ハ及んでハ文のハハハを  
厭ハ畧せらるる多し追て博

物筌補遺と出して悉く誦  
凡例終

引用書籍目録

此各本文注解トモ一々出處ヲ記  
サスト金トモ一事モ安リニ筆スルニ  
非ス左ノ各ノ内ヨリ板各ス此各  
編述ニナヨリ凡三十年間儒者佛者  
和学者職原家哥人俳人天文者  
其外諸先生訂正歴ヲ漸ク當年春成

万葉集 古事記

日本書紀 日本歳時記

文德實録 三代實録

拾芥抄 五家髓腦

延喜格式 源氏物語

伊勢物語 采花物語

枕草紙 徒然草

北一代集 藏玉集

莫傳集 新撰六帖

夫木集 定家三部各

順和名	筑波集
大和本草	本草綱目
本草拾遺	花鏡
卿茅本草	採取月令
月令廣義	輟耕錄
三才圖會	前後漢各
階 各	唐 各
梁 各	後晉各
字彙	爾雅
博物筌	五經
四 各	法花經
涅槃經	華嚴經
杜律	李白集
白氏文集	唐明詩集
文選	引各目錄終

月令博物筌 大意

一此書正月門松ヲ五ノリ年ノ終迄  
 年中ノ歲事故事ヲ集ム上禁中  
 公事故實ヨリ下民ノ諸式法月  
 異名草木・魚・鳥・虫・獸等迄不  
 殘集メ來由故事ヲ述譯ヲ委レテ  
 記レ異名・漢名迄不洩集ム月  
 一冊上レテ正月ヨリ十月迄ヲ冊分ル  
 一草木種類花形其外何ニ依文ニ  
 テ分リ難キモノハ夫々圖ヲ出マ  
 一條毎ニ哥・哥ノ詞・連哥・俳偈・  
 在哥・詩・詩聯・故事ヲ夫々委テ  
 作例證據トス  
 一生花ノ正式・衣服ノ正式・養生法・食  
 物善惡・料理・飲食・年中ノ吉凶・米  
 ノ豊凶ヲ知法・草木植栽・藥物  
 貯メテ・妙術・妙法・風雨ノ考  
 等何レモ月々日々ニ記ス  
 一年中公事祭・草木・生類其外何ニ  
 不依是迄能借ノ季ニ用上來物公印

ヲ付ル但正月季者物二月三月用物ハ  
 ①印ヲ附ル十一月に如シ哥ニ春ニ  
 成能冬冬成物ハ其餘下ニ註解ス  
 四季折々遊山龍水等ノ手紙ヲ其  
 節序ニ加ヘ尺牘ヲ旁ニ付テ上中下  
 ノ各替ラレテ漢文ヲ作ル便リト  
 漢文淺学ノ人ト雖此各ヲ見レハ  
 即時ニ文章作ラルヤウニ設タリ  
 此各雅俗日用重法ノ各ト雖亦來公哥  
 ヲ詠能借ラ作久為ニ撰公各チ故ニ  
 七十一候ハ毎月六候マ出ス右來ル生類  
 七十一候也草木七十一候有他各ニ無キ物  
 ナリ此各六出外ラレテ委々註解ス其  
 外是追他本テキ季成物多ク出ト古  
 哥ヲ如ヘ作例トス  
 一詩詩確詩聯尺牘多ク出詩作ニ便故  
 二哥人能入詩人傳字ト雖失念ニ備ニ  
 右此各大抵ヲ奉ケ示ス年中ノ事多  
 ク品類ナバ一々例ヲ記スニ暇アズ次ニ  
 門部分々大意ヲ記ス

大意終

門部分並目錄之註

正月

始の九の印は其月の  
 干支・八卦の其月不當る卦  
 調子の其月不當る律呂・陰氣陽  
 氣の生じる数と記し其訳と解

節立

此九の印の内ハ其月の節・  
 七十二候・草木七十二候・昼夜  
 の長短・日の出入外の方角と記し次  
 右の註解と委々く看す

中雨

此九の内節より十六日申・七  
 十一候日出食外量出と夏節同

日令

此部ハ其月日定りたる事ハ長行  
 事・五節句式・諸祭・風雨の考  
 養生の法其外日の定る入用の事と出

月令

此部ハ日の定りたる事と其の  
 月一ヶ月の事とありし

時令

此部ハ時氣拍りたる事と出  
 譬ハ正月ハ初春・餘寒  
 等の事又三月ハ暮春・三月

尺さびく時侯かゝる事とのと

草木

此部は其月の草木と集む但妙  
菜あり物病症用ひやうと記す

生類

此部は其月の魚・鳥・虫・獸  
諸の生類とあつむ

必用

此部は日の定まらざる其月一  
月の養生の法・風雨の考・米・豊  
凶・妙術・天氣占候・料理献立其外  
入用の諸の雑事とあらず日の定  
たる事ハ口の日令の如ニあり

故事ハ如此かここの内ニ有  
白字ハ一なる処もあり

此のぶらいたの妙菜なり  
詩哥連俳ハ始り此のぶらいた

ありあり次ハ一めりありあり  
異名天廣ハ始りみり印あり

日々養生の法・風雨の考・五穀諸品  
の高下・季と時以諸祭・妙菜・妙  
術・詩哥連俳故事其外日々重法  
ある雑事ハ部ハ枚多あり目  
録ハのぞと本文と見て知べし

正月部目録

△印ハ能借の季  
をり物あり

養生の法・雨風の考・米の豊凶  
。妙菜其外人家重宝の事ハ如々  
ありゆへ目録ハあるさん

發端

春の異名  
春の由来  
一丁

正月

調子  
三丁

正月古今違

立春節  
四丁

△若水

雨水  
正  
十六日  
正  
十七日

正月日令

此部ハ正月日の定まらざる  
好の定りたる事と集まらざる

△元日

元日異名  
正  
十五日

△元日賀

四方拜  
正  
十四日

△星と唱ふ

屠蘇白散  
正  
十四日

△朝拜

院拜礼  
正  
十六日

△元日節會

諸司奏  
正  
十五日

△七曜御曆

氷様  
正  
十五日

△腹赤

國栖奏  
正  
十五日

日朝



△齒固 正 幸 △鏡餅 正 幸

△門松 正 幸 △注連飾 正 幸

△大饅 正 幸 △惠方 正 幸

△門神棚 正 幸 △蓬萊 正 幸

△雜煮 正 幸 △料物 正 幸

△太著 正 幸 △開豆 正 幸

△加賀御草 正 幸 △鯨鱒 正 幸

△押鮎 正 幸 △俵海鼠 正 幸

△小殿原 正 幸 △海麩 正 幸

△螺肴 正 幸 △掛鯛 正 幸

△葩煎賣 正 幸 △年男 正 幸

△大福 正 幸 △福藁 正 幸

△庭竈 正 幸 △福鍋 正 幸

△幸木 正 幸 △鬼打木 正 幸

△毘沙門功德經 正 幸 △若戎 正 幸

△星佛 正 幸 △懸想文賣 正 幸

△初鷄 正 幸 △楯積 正 幸

△初夢 正 幸 △三物連歌 正 幸

△三物俳諧 正 幸 △祇園削掛 正 幸

△初春 正月日の定まらざる歳日と  
とるつりのとありむ

△若餅 正 幸 △破魔弓 正 幸

△羽子板 正 幸 △胡木子 正 幸

△毬打 正 幸 △玉打 正 幸

△宝引 正 幸 △年玉 正 幸

△書初 正 幸 △去年今年 正 幸

△毬はく 正 幸 △御降 正 幸

△三々日 正 幸 △松の内 正 幸

△春永 正 幸 △藏間 正 幸

△湯殿始 正 幸 △弓始 正 幸

△ひめ始 正 幸 △馬乗初 正 幸



△縣召除目	△花朝節	△踏歌	△十四年越	△土龍打	△御薪	△平園御粥	△御穂祭	△女踏歌	△明神々詠	△禁裏伶人の舞御覽	△賭弓	△吉田社清板	△元日だんご
正月	正月	正月	正月	正月	正月	正月	正月	正月	正月	正月	正月	正月	正月
△事始	△解齋御粥	△削花	△頭挿綿	△繩引	△赤小嘉納祝	△上元	△獅子頭神事	△走百病	△十六日櫻	△籠包丁	△幡尾神祭	△元日正月	△殿鳴祭
正月	正月	正月	正月	正月	正月	正月	正月	正月	正月	正月	正月	正月	正月

日一

△初天神

正月

△初不動

正月

△内宴

正月

正月令

此部ふの日の定よりさる正月  
一ヶ月の事とあらむ

△外記政始

正月

△店卸

正月

△偶假師

正月

△夷廻

正月

△初芝居

正月

三節

正月

△歳且開

正月

正五月の説

正月

正月男女衣服式

△さくら衣  
△やぶと衣

時令

此部は初春の時候より  
初春の事とあらむ

△初春

正月

△餘寒

正月

△春雪

正月

△残雪

正月

△雪解

正月

△春氷

正月

△山笑

正月

日待月待

正月

草木

此部ふの正月一ヶ月のふり  
木の多いとあらむ

△松の花

正月

△梅

正月

△土筆 正辛 △福壽草 正辛

△けしき若葉 正辛 △若草 正辛  
△木芽 正辛 △木芽 正辛

△下萌 正辛 △木芽 正辛  
△木芽 正辛 △木芽 正辛

△若根違 正辛 △木芽 正辛  
△木芽 正辛 △木芽 正辛

△水菜 正辛 △薑 正辛

△鶯菜 正辛 △露臺 正辛

△田とど 正辛 △堀入大根 正辛

△生類 正辛 暖かい正月の鳥けり等の奥  
虫のさしをあらわし

△猫の妻 正辛 △白奥 正辛

△朝鷹 正辛 △鷹の種 正辛

△鳥さうろ 正辛 △浅蜷 正辛

△飯鮓 正辛 △春駒 正辛

△必用 正辛 此部は風雨の占の破軍の向方日取  
のりあり。他行の心得。作事の吉

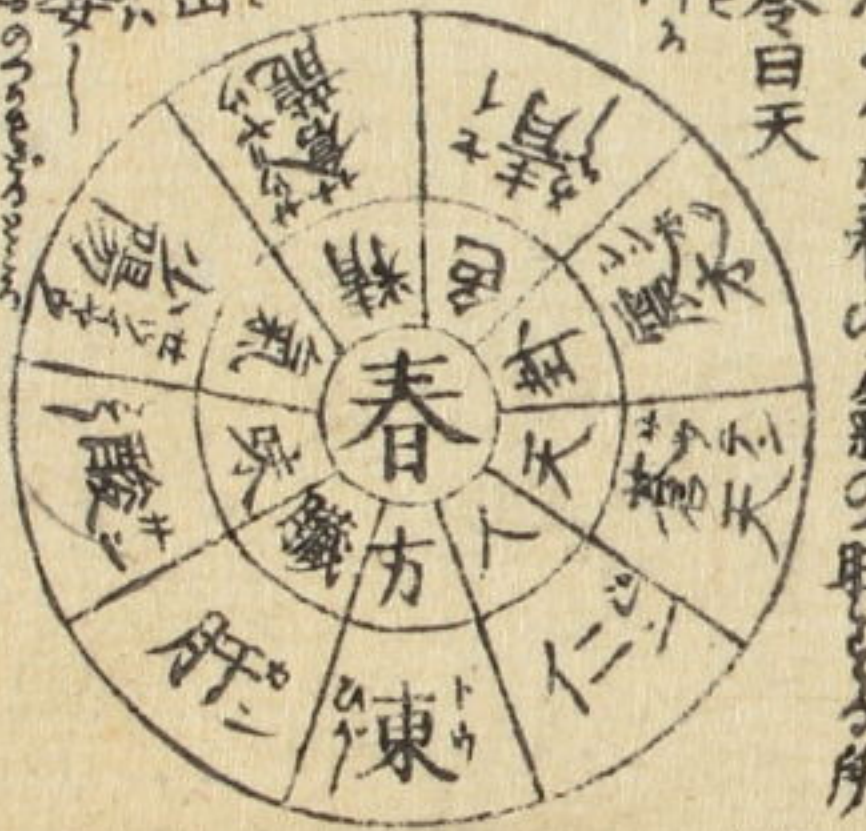
△必用 正辛 此部は風雨の占の破軍の向方日取  
のりあり。他行の心得。作事の吉

△必用 正辛 此部は風雨の占の破軍の向方日取  
のりあり。他行の心得。作事の吉

正月月録終

### 月令博物筌發端

九月内ふかたさるる春の氣の旺るる所  
と記する之月令曰天  
の陽氣下り降る  
地の陰氣上り  
騰る天地和合  
交泰する故草  
木芽ばら萌出  
發生するを春  
第二葉春爲主



### 春由來

漢書律曆志云春者  
春也春也ハ物の動を生

通説云春之言發也草木芽發  
也云月令天地和同草木萌  
動也

○本朝して齋部正  
也云月令天地和同草木萌  
動也

○山崎の久世也  
是と以て考査其のなるを云説  
万葉集とて據して

是と以て考査其のなるを云説  
万葉集とて據して

惣じて本朝の古言古訓と云い万葉日本紀古事紀ふよりてさるべし或説ふ春といふは晴といふ・空麗小晴るといふ心ありといふ

**春異名**  
太皞 青帝 青皇  
東君 句芒 蒼天

青陽 陽和 花蓋 迎陽 韶光  
○太皞と云い唐土伏羲帝のこと

木徳の君と云い唐土昔より世々小日本の年徳神と祭らるる春

乃初小祀と云い禮記月令云太皞伏羲木徳君云○青帝は春神

るりと楚辞に見るる○青皇も春の神と云い青皇恩澤無窮限

なとく詩小作と云い○東君郊祀志曰晉巫祀東君顔師古曰東君

日の神と云い○句芒は少皞氏の子重といふと木神と云い春の神

と云い太皞と合せ祭らるる○蒼天といふ氣の初て發して

色蒼々たるを以て稱する○青陽は天地の盛徳春の木は有る木色青々といふ以て青陽と云い陽和といふ白居易が詩に先遣陽和報消息と有る○花蓋といふ夏侯湛が賦に春可樂兮綴雜花以為蓋といふと云い○迎陽といふ立春といふあり○韶光といふ韶の美也云い春の景色のうらやまといふ猶漢書律曆志に媚景或は韶景といふもこれなりと云い

○解凍といふ礼記の月令小春のころ○新陽は詩學大成に出る

○微和といふ陶淵明が詩に出る

○華始といふ礼樂志に出る○歲始といふ公羊傳に見る○春生といふ律曆志に出る○木徳は震宮初動木徳唯仁

**春為主**  
東方

と有階青帝

と有歌小見也

云ハ駢の說卦傳曰帝出乎震  
齊乎巽又曰萬物出乎震震東  
方也又曰兌正秋也萬物所說  
也これと云まじり震之正春あり  
く明者一〇陽仁者の徳小  
く春陽の氣仁の道と守り  
蒼天と云る春の東方の正色蒼々  
然じて晴故蒼天と云る〇華の  
震はて震の木の象入〇色は木徳  
青緑と主と云る故青陽と云る  
礼記春と東郊ふひう青馬七  
匹を用やといふ〇精は蒼龍とい神の  
体精用也春の用の能發生と龍乾  
の用にて陽の靈能動發一速盛を  
象入〇少陽勞陽少陰勞陰の四象の  
初て春の氣入是少陽明厥陰と加へて  
六氣と云〇味は苦と云る〇肝木屬  
一春の肝尤旺と云る死氣肝小入り  
△右の外春三月の季乃りの三月  
の部乃と云るす

### 正月乃部



### 異名

初春 發歲 三陽 初陽 暮新月  
新陽 謹月 △太簇 夏正 睦月  
〇十一月始  
子の月とす十二  
月ハ正月寅とす

### 異名註

〇正月と一月といはせて  
正月といふ正一き也  
いハ義あり〇正月と謹月といふ正  
月の始を謹むべき候と云る  
〇正月と太簇といふは太の太と云る  
訓簇と云るむと云る春の陽

氣分て万物とてみ生じり心あり  
 ○限月といふ亦雅言正月の夏と  
 いふ限の寅の月とあり○夏正と云  
 塵夏の代より寅の月と正月とする  
 の人多くあり○賤月といふ亦  
 清輔輿儀抄に如く貴き賤き  
 ひつまいゆきまきありしは月  
 としと暑しとありし○暮新月と云  
 新として新き月とありし故名つ  
 ○大節月といふ俗入の子れ初め生  
 くと太郎といふはさへ生きたるな  
 次郎を名つて故昔は初月故名つ  
 哥 初去月 藏王  
 辰月といふ去月の朝日け  
 のつけこきやまふとありん  
 哥 初空月 後鳥羽院御製  
 吾はるあふさしやうまま  
 さえあし申のふりなり月  
 哥 端月 御集  
 まの基くいとよきあはれま  
 いざらけりさみのびの月

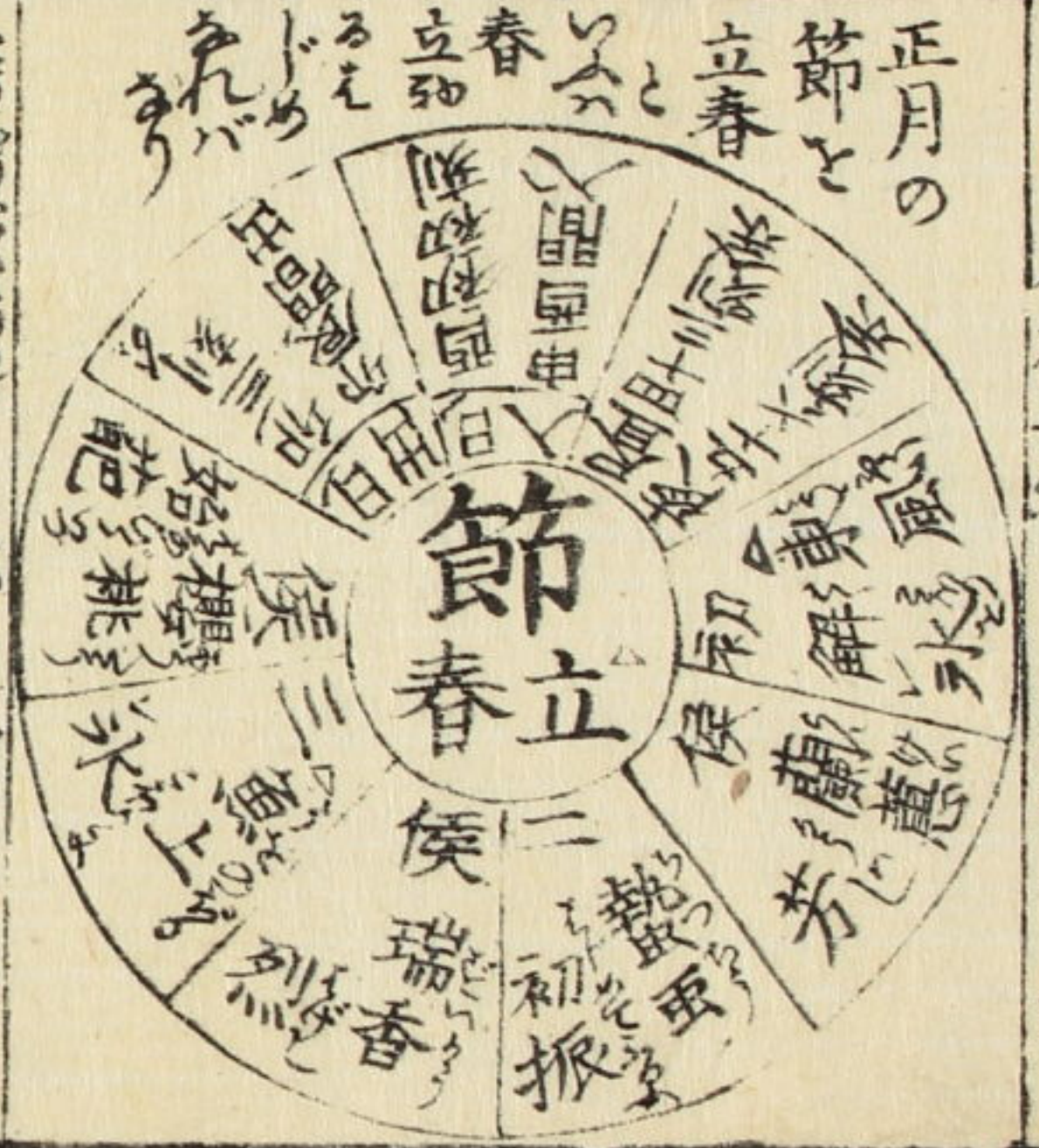
正月古今違

一年十二月の干支を定む其月の中

十一月星の斗柄建府の干支と以て  
 定む 斗柄の建府とてありしは俗に  
 正月 斗柄の建府の干支と以て  
 正月 斗柄の建府の干支と以て  
 正月と寅の月とさしむり  
 ○塵夏商周右三代正月別々  
 夏の國禹王の世より寅の月と正月と  
 今の正 商の湯王の世より正月と以て青  
 とけ 殷の文王の世より子乃月  
 と以て 周の文王の世より子乃月  
 一理あり 亥をり 天を子小開くと以て  
 周の子の月と正月と定め地は子小開  
 史商ハ丑の月と正月と定む人の寅亦  
 定む 夏ハ寅の月と正月とさしむ  
 天地人間と初より 其後秦より世にさ  
 本傳博物學に  
 て 古典と悉く改めて亥の月と定  
 正月と定む 今ハ漢の代も是より  
 し 武帝の時始て古代の通りハ改め  
 寅の月と正月と定めり今亦寔に

本朝の神代より寅の月と正月と定めて候はるるよし此論春秋正月考とつくる書小委一ありらね事あり見さべし

**節** 立春の七十二候。草木七十二候。昼夜長短。日出入等左記と



△東風解氷といふ冬の寒風も氷も春の東風と受て解初。蘭蕙も風蘭也。蟄虫の冬虫の地中より出づ。春の氣にてそろく出づ。瑞香ハ遊といふなり。櫻桃ハ庭櫻なり

**立春天氣** 立春は北方か紫緑白の雲

あまは三素飛雲と云て三元君天上に詣る日なりはてんて再拜とて必ず福ありと隨書い見さる○三日晴天をまを

豊年○前後三日の間風雨少くもまは其後四五六日の間天地の氣とつので万物はあつひまえ又人の身も安全かて病少くとさる若又四五日と前より雨あまは其後四十五日風雨少く四五日後は風雨あまは

**立春占候**

此日四方は黄なる雲氣あまを五穀よく實のる青なる雲氣あまは虫五穀とやがる○日いよと出づり時東は黒雲あまを春雨多し西はあまは秋雨多し北はあまは冬雨多し○東方は





春風吹くつとく月夜はひくは

とくはあやうくとあやうくと

ハハ冬のももいさむいさむ

龜山殿百首 立春日 六条有忠

年いともくはあはてふともく

老せぬまがたけりさるる

夫木 西行

とくま山まはあはてあはて

とありさたてくくういさむ

龜山殿百首 立春日 後宇多院

えうあ天れ春之山むあはて

まうらなふのそふとあうけ

同 立春日 同上

足訂の山はあはてまのそ

日新いけさもあはてあうけ

夫木 山立春 知家

いそや山天の雲より今うら

あはあま井かまのそあうけ

立春霞 素然

ほのほりねもあうけのいさむ

春をそとふま乃うらうら

詞 立春日 本末 立春日 春

うらうら。物日新。秋りあはて

せぬま。霞物。あはてあうけ

春はあ。千代にあはてあうけ

花のまの。まどむら。あうけ

春まらえら。あはてあうけ

うらうら。あはてあうけ

いそやのそ。あはてあうけ

連 春うら。あはてあうけ

立春故事 鞭春牛 前一日

開封府ヨリ春牛ヲ進テ禁中ニ  
入テ春ヲムチナシク春ハスム義ニ取

ナリ百姓皆合春 泥牛 年  
牛ヲ賣ルトイヘリ

ヨリ土ニテ牛ヲ依リオキ 綵  
寒氣ヲ送ル月令ニ見テ

燕 歳時記ニ立春ノ日悉ク  
綵ヲキリテ燕ヲ依リテ

宜春ノ文 賜綵勝 唐ノ朝  
字ヲ貼ス 廷ノ制

ニ立春ノ日侍臣ヲ望春官ニ  
召サレ春ヲ迎ル人毎ニ綵勝

花トテ依リハナヲ賜フ由 農  
文昌雜錄ニ見ヘタリ

祥正 農祥ハ房星ノ精ナリ  
正レトハ農ニ南ヲ加

ニアラハルハナナリ 葭灰ヲ飛  
國語ニ見ヘタリ

立春ノ日葭ノ葉ノ灰ヲ律管ノ  
端ニモリミテオケバ春氣至ル

時其灰オノツカラ飛ヨシ委  
シク事文類聚ニ見エタリ

歌 青陽 後漢書ノ祭祀志ニ  
云ク立春ノ日東ノ郊

ニ至リテ春ヲ迎フ車騎服節ニ  
ナ青シ青陽ヲ歌ヒ雲轂ヲ

舞フトイヘリ  
歌曲ノ名ナリ

詩 立春五字對句 同上  
詔光開令序 惠風初應律

唐ノ則天春時令ヲ受  
淑氣動豐年 和氣正調梅

春ノ溫和ノ時令  
詩 立春七字對句 詩 礎

三陽候節金為勝 氣象新  
立春ヲニチエタル

百福迎祥玉作杯 應陽春  
年酒ヲクム

若水 新水去年の生氣の方此井  
を鎮めて蓋をして人よ汲

せど春ノ日主水司内裏ホ  
奉ル朝餉ふされをきちりめ守

三月 若水 二月 春時 正ノ八

正月七日立春  
正月七日立春  
正月七日立春

たり新玉の春より日奉き若  
水といふ去年より井と封置  
包井開くともいふ世俗母若水を  
元日とする委りいせ三丁めあり

年中行  
春の歌をよみて  
春の歌をよみて  
春の歌をよみて

元日立春  
万葉  
久々のとれお山

建長哥合  
立春  
頭朝

連春まで  
かひらの始め  
春宗因

狂  
古今夷曲  
哥慶

春の山といふ  
あそびも  
○哥の詞ハ立春ぬて見合用也

詩  
元百著五字對句  
同上

春城映朝日  
綵仗迎春日

緑柳揺春風  
細煙接瑞香

詩  
元日立春七字對句  
詩礎

瑞色含春當正殿  
轉綠嶺

香煙捧日在高樓  
瑞色新

瑞氣朝浮五雲閣  
紫氣中

朝光夜吐萬年枝  
曲迎春

春風掩映千門柳  
四海中

曉色融和萬井煙  
象昭回

散臘迎新淑氣回  
一年程十

正月立春詩

又春二立ケ乾坤此日泰初開

カハルトナリレ天地ノ氣モ三陽地ニアラハ

庭前積雪徐々レ化レ天地ノ陽

雪モフコトレ天上和風習々レ来

年内立春レ元日よりまゝ春乃

小の十二月の季と定むといふ

和哥の式も舊しと此處より出と

哥續古今 入道前大政大臣

吾ぬらふ心やめさるるも

詞の内の春よりまゝ也

年。このまゝさふ。どれか

さ。そのまゝさふ。どれか

年。そのまゝさふ。どれか

春ニツえおるるを返すの一夜は淡々

詩 立春之詞

仙家日月本長生 仙人ノ又ム

トヨリ長生ユヘ日月モ

トコレナヘニノグルナリ

迎春亦寂然 冬ハクレ春ニ

コトモナクモノレツカニシテ各別ニ

アラタニリタルコトモナキトナリ

翠管銀鈎傳故事 仙宮

器ヲモテアツブコトハ常ノコトニテ

金花綵勝作新年 金銀ニテ花ヲ

疫病を除く方 立春のいふ

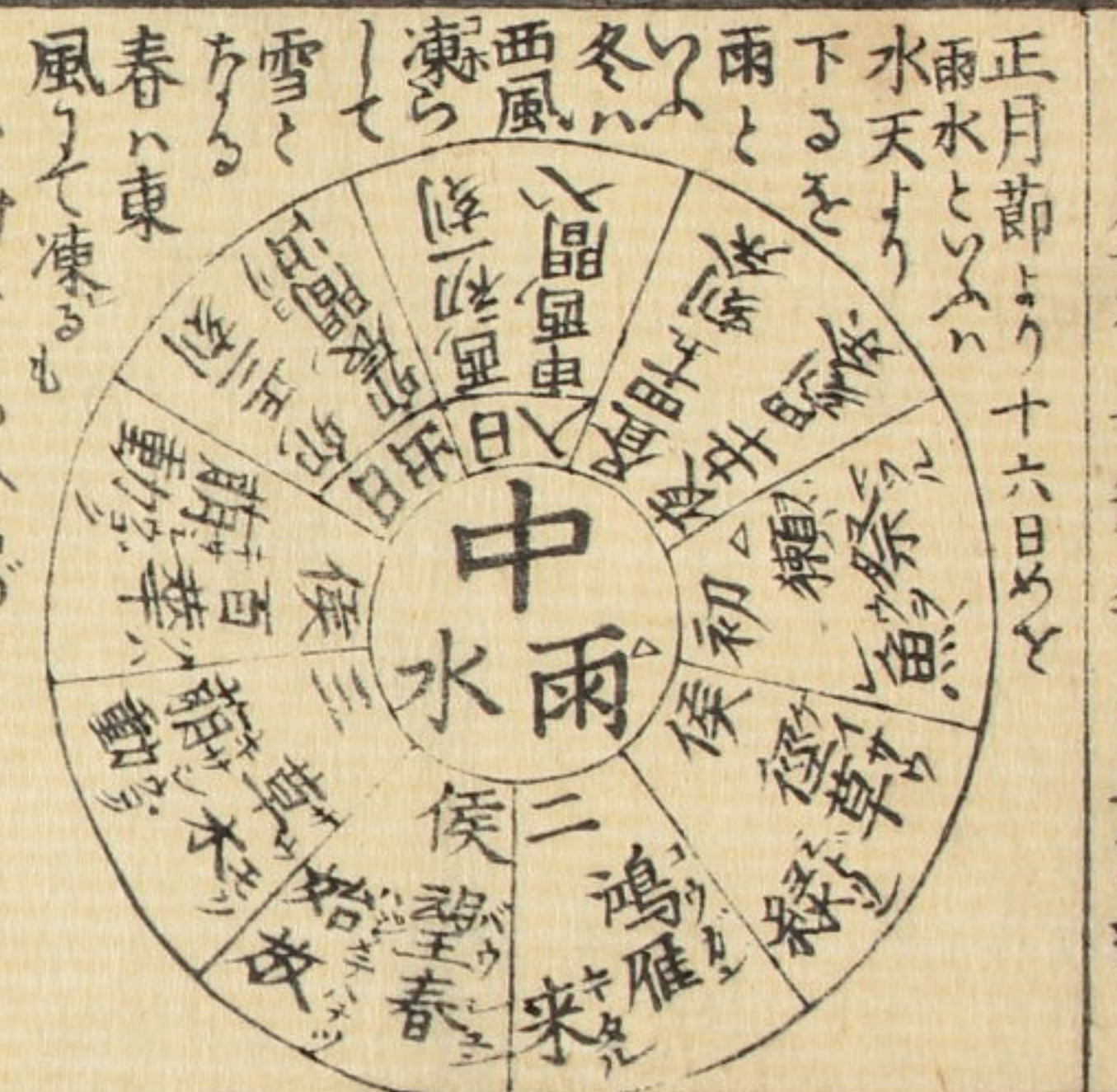
子の日蔓菁を搗きけり汁を

とりあさるゝ先て家内とを

小服とれば疫病を除く

中

七十二候。草木七十二候。日出入。昼夜長短委しく尤も記さ



正月節より十六日まで

懶い常小魚とどうして喰ひ命とほさぐゆへ其息を報じると春のそと

名小魚をとりて祭ふるあり。徑草へ道辺の草也昔々成鴻雁

のうの事之陽氣ふるに次第小南より北へ帰之。望春始放と云夏初變と看草木

百花陽氣惠れて梢芽立萌動之。熊柳のなるるとて来よせし裏蕉翁

日令

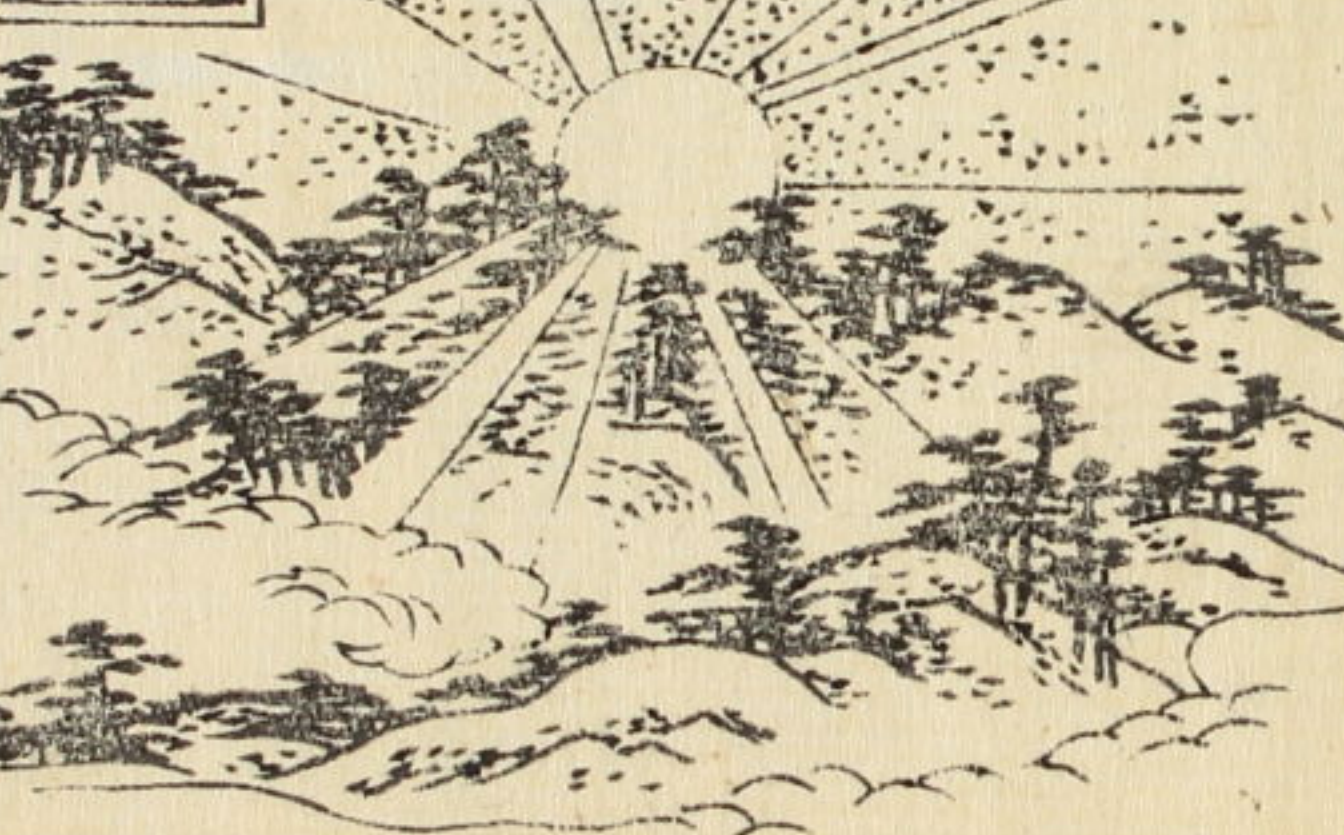
正月日

の定り

千支の

定り

日令



朔元日異名。有。鶏日。今日と鶏日。日註證哥。其。とつふら東

方朔り占書ふ出て八日迄悉く名あり其日天氣和順され其名づる所のものさうるとあきども其理通一が此事實原先生日本歳時記ふ来なく弁あり見るべし面白き事なり

天氣

元朝々く大雪ふ多。旱年とあふべし。晴天

るれば年ゆゆるめて人民安し  
風雨これ米價貴し○微風  
細雨あれば梅雨の内日和長し  
秋洪水あり○三ヶ日の間風雨  
まくりりて日色と見れば二年  
の大美をはりこと候○四方晴天  
自然と和氣ありて春のけきき  
うわかると豊年と雨みも  
あはれと黒くかりて陰々  
れ又美あり○東風吹は夏に至  
る米價賤し○南風吹は春  
より夏ふりて米價ややく  
又旱をはりさると西風ふけば春  
より夏の米價貴し豆ハ能實  
のつく北風ふけば水の災あり○  
今朝東北より風吹は五穀熟し  
て年豊あり西南の風吹は大水あ  
りて耕作のさむげとある東南  
の風は南風吹は雷鳴て寧  
かす○今朝北より大風吹む

春の中人民病ありたると大風を  
どとも北風吹は春の中多く病あ  
るべし○終日北風吹は其年とや  
り病のよまある事あり○南  
方より風ふけば旱とありあり  
○今日大風吹は蚕破きて糸の  
價貴し又五穀のよす○天晴  
と暖ふりて風ふれば五穀よく  
熟し米價賤し人民安全  
めで病もふくゆるあり○今日  
雪ふれば豊年又  
占候 元日甲  
早とつらさふ  
まは米價賤し或いは人民疫  
病を煩ふありふあはれは米價  
貴し或いは人々病あり病ふあ  
はれは四十日の旱あり下にあ  
たはね終綿の價貴し  
あし成あはれは麦粟魚塩  
の價貴きあり或は旱とある事  
四十五日あり巴あはれは米價貴

く或ひの蚕あり或ひの雨風多  
 し或ひの金銀の價貴し  
 或ひの米實のり又ひ人少病あり  
 或ひの麻麥の價貴し或  
 ひの和太又ひの米  
 の價貴し又ひの米  
 あり或ひの人民疫病  
 を煩ひ又ひ雨多し  
**十二月**

**晴雨考**  
 元旦水茶碗一杯  
 杯汲み其目とけけ

をき二日ふも又水茶碗一杯  
 汲み目とけけ  
 水元旦ふも又水よりと  
 重き時其月雨おほく輕  
 きと死に晴修を二日老を  
 二月三日老の三月四日老を  
 四月と次第く小となりて十  
 二日かちて見まは十二月  
 までの晴まき雨  
 ととあくるあかり



**元日賀**  
 今日を賀する始  
 本朝して神武天皇

の御宇より始る唐土して漢  
 世よりそのまてあまを  
 日本より四百年をり後のあま

**元日異名**  
 註證哥奥  
 △三朝

三始三微三元四始元旦  
 正旦青呂雞旦雞日正朝  
 淑節詔節嘉時初正初陽  
 更始履端天臘上日聖日

改旦歳旦元三年頭初年  
 新き年明年年立あ

玉の年 年の始  
 三の朝 日れ始め **四方拜**



元旦の寅の時皇の屬星と  
とせ天地四方の山陵と拜し  
しるの年災を拂ひ空祿を  
祈り申さる事小侍ふるや  
清涼殿の東階の前ふて屏風  
とせ白木の机よ香花と立  
行いふ事 **星ととる** 年中行  
合まいつ當年の星本命星  
をまいつ返はくとるふ事  
佛とて祭るも其まゝろをへ  
とるふことなり **年中行事** 合  
とるふきの星ととるふ事  
光りのふき **供御薬** 天  
まの茶いなり **子**  
畫の御座ぬ出御さうて御衣  
を御生氣のこの色ふりく  
さむらひて菓子とていふと嫁  
せざる小女よ先吞しとるふ事

屠蘇小児より初 其後銀器  
白散をすく免奉る三献小度  
瘴散をすく免奉る三献小度  
**年中行事** 毎小くふりしむる  
菓子いりえつとん君うねるか

**屠蘇白散** 嵯峨天皇の弘  
仁年中に始て

これを行つ一人ふとと吞むと  
を一家病さ一家これを吞ぬ  
まは一郷病さ一郷これを吞ぬ  
記ふとるいひく道士毎年除夜  
母間里ふ来てて菓一貼と贈て  
紅の袋よ入きて井中いひては  
置板元日其袋と水中よりとる  
わげ酒ふ和してこれを吞む瘴疫  
を病ととる屠蘇はあるといふ  
蘇いふととるといふ邪氣をか  
ふりほろちり人の神ととる  
ととるの理なり醫家には多く

上小点を加へて屠蘇と書く  
此某方より十二月の部あり

非松肥の末を共さし  
紫府僊人授寶方

詩屠蘇酒  
紫府僊人授寶方

命調金鼎  
八神ハ八將神一年ノ金運

尺井  
靈液ハ屠蘇ノ自然汁ナリ大

春風曉入九霞觴  
九霞觴ハ

朝拜  
朝賀奏賀 元日小群

公事  
神武帝元年正月朔日柏

臣の命等天瑞と奏せりあり

朝賀  
年中行事を此上に

院拜礼  
同

事と々  
元日節會

諸司の奏

七曜御曆

氷搦腹赤國栖奏 ふるまうの事

と元日奏聞す 後所の奏聞

とてのち紫宸殿 小渡御ありて

百官小酒となす 言 音番歌合

のべよとよ代の あるべきをく

諸司は奏 元日節會の齋ふ右

奏 七曜御曆 木火土金水の

七曜の事と書 するよあつひの曆

る あまを節會小奉る事

氷の様 聖の御代か冬氷の

去筆氷ととりて 室は納免と

節會の はいて小奏聞とるる

其時氷の 薄さ厚さを是れ

石瓦の よんを奉る事あり延喜

式は氷池風神の 祭りして氷れ

さ年 の大法秘法を修して行ふ

事あり 仁徳天皇より

事 行軍の御代にあり

詞 かきまゐる代をさるる年表の如

非時 淳く人厚ふ

腹赤 腹赤の

國栖奏

應神帝 芳野へ行

幸の時 芳野の奥

國栖 のちの者奏して

醴酒 を

奉 其後毎年奏内て

年魚 やうの

の と奉る歌と

諷 いしきり今

奏 内と事いほ

今 國栖の奏と

歌 うたひ節と

吹 芳野より

奏 う心國栖

詞 芳野の

年魚 献て

國栖 奏

年魚 献て

國栖 奏

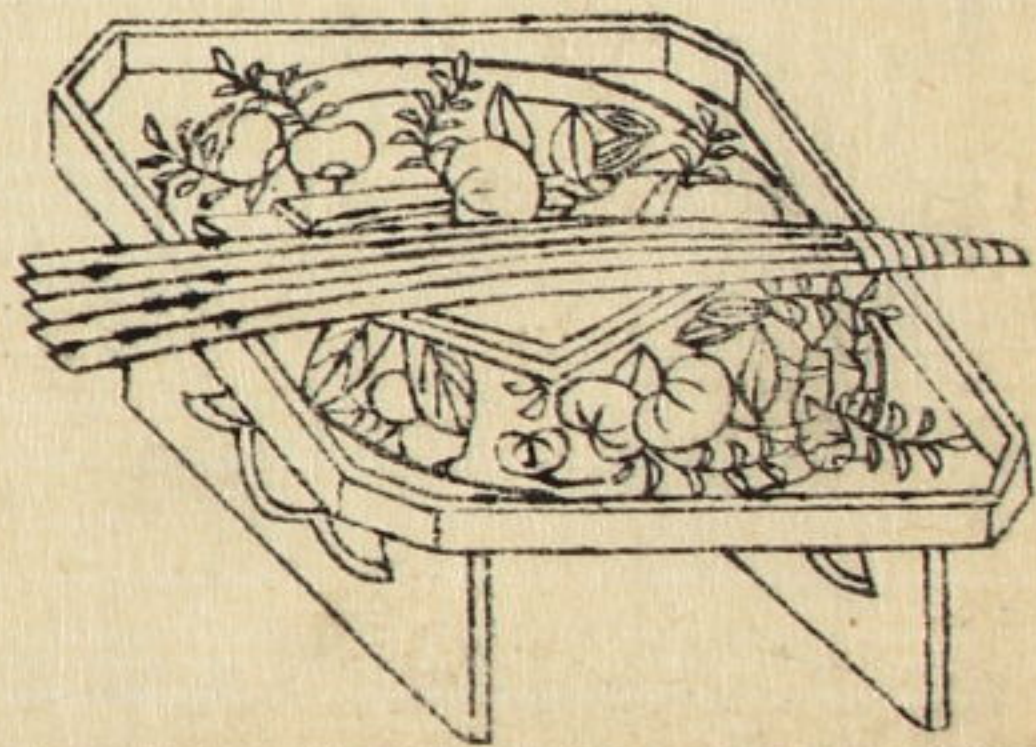
年魚 献て

國栖 奏

年魚 献て

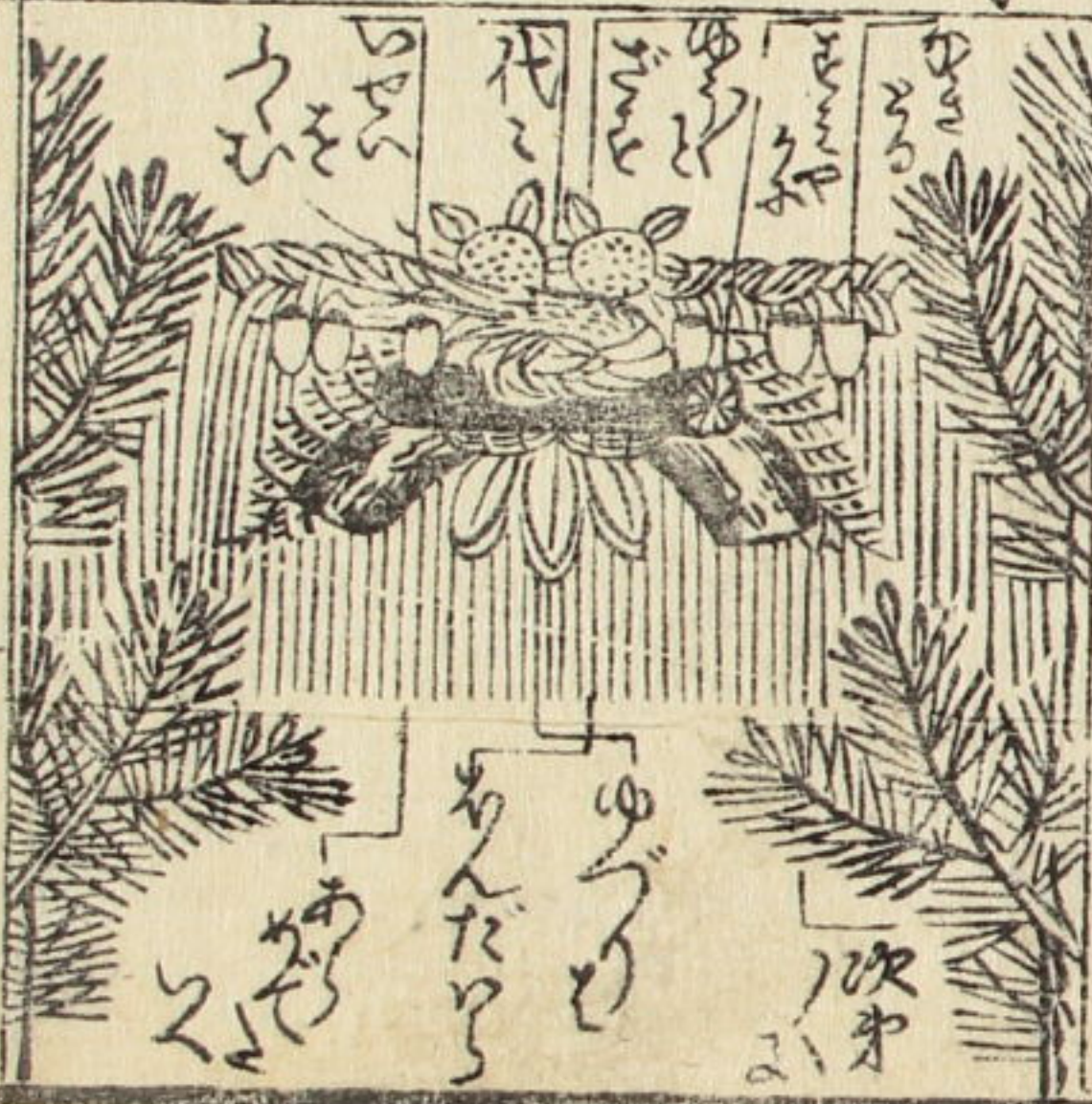
齒固

餅と鏡とて  
向ふとい人の齒  
と以て命とする  
ゆ齒の字を  
よつひともよむ  
よそひをかこ  
むらうらう



高根一本に折敷をよ一の莖  
か大根播とらふらり此餅ハ近江  
の火さりの餅を専ら用るる  
おはよやと哥小鏡山と寄てよむ  
あらう在家の鏡餅ふとどゆぐり  
葉をささ侍るハ清少納言が枕  
草紙よゆぐり葉の事とよよとて  
まことよらひのづらえがめのかは  
てはくひた老るまき一名を親子草  
といふより藏玉集おわり(おま)  
あふまのやがて炭のふとそなまは  
かひてぞ見えゆるまが子とせハ

門松之圖



門松  
△立松△松△竹△門松  
△松のり△門の竹△門松  
鏡餅 神小供の餅と鏡の如く丸  
くまを故名△り△り△り△り  
狂子とて花のかえとる餅  
ゆぐり葉。う。白。大根。松。か。え。葉。  
おやこ草。よ。り。ひ。め。ひ。る。や。は。く。さ  
餅 齒固やかひとまら長袴 裸虫  
詞 けらひのゆえに餅 齒乃木  
あふまのやがて炭のふとそなまは  
かひてぞ見えゆるまが子とせハ

正月 日金 正月 正月 正月

松の千歳と契り竹の万代と契る  
よのちの年始の祝も用ゆるは  
一条禅閣の御説より又松の千返  
アとて百年の一度花咲ても春也  
千年のより有とて年の始不用し  
◎新六帖に今松をさきの松と  
たてて後をさきの松とさぐり  
◎詞苑の松は民代松。民の戸。注  
連。而松の松をさきの松。年の  
始。年のくわむむ。多て松。門松  
◎非二足より松の松をさきの松と  
門松とさきの松をさきの松とさ  
◎狂餅つぎ松は松をさきの松とさ  
かす家の松も正月の末川 一休和尚

**藁盒子** 藁のくさしたる藁を  
物と指へ門松をさきの松とさ  
**饅炭** 土中へ埋りて久し饅炭  
本草にこれを戸内へ立饅炭  
邪悪と避るとあれ用る饅炭  
◎非之月れとさきの松の松とさ  
其角

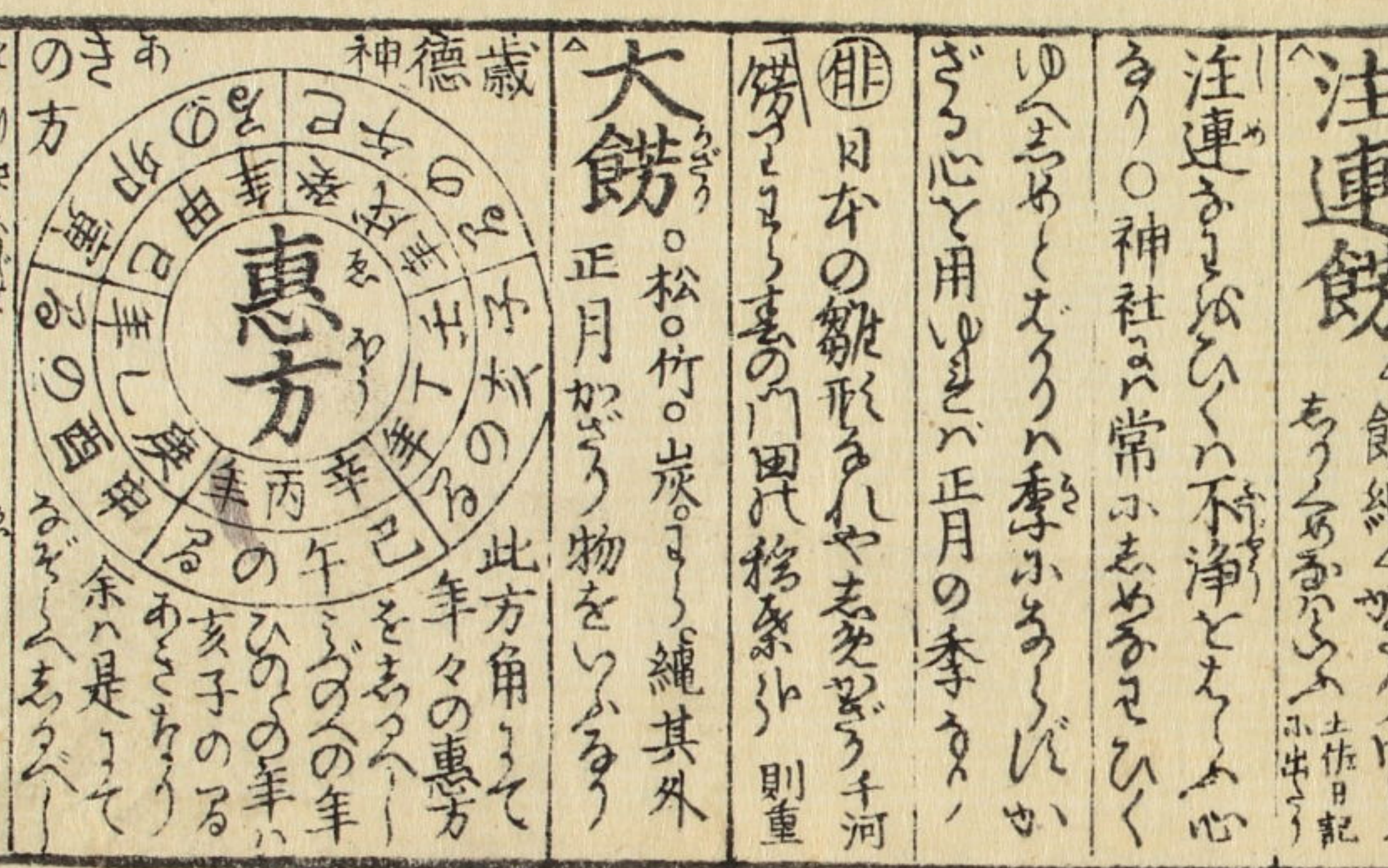
**注連餅** △饅炭△松のり  
ちうとさきの松注連餅  
注連餅は松のり不浄とさきの松  
なり◎神社に常小志めさきの松  
ゆゑめとさきの松の松とさきの松  
さきの松と用ゆるは正月の松とさ  
◎非日本の餅形をさきの松とさ  
饅炭とさきの松の松とさきの松 則重

**大餅** 松竹。炭。繩。其外  
正月加さき物をいさる  
此方角にて  
年々の惠方  
己をさきの松  
午の年の年  
ひの年の年  
亥子の年  
余は是にて  
さきの松とさきの松

**惠方** 此方角にて  
年々の惠方  
己をさきの松  
午の年の年  
ひの年の年  
亥子の年  
余は是にて  
さきの松とさきの松

婆利賽女の神と元方ふいひて  
かたのりら雜煮を供へる  
△元方黍 △元方棚  
方角にてさきの松とさ  
◎非之徳へ四方の松や引かお良徳

△元方黍 △元方棚  
方角にてさきの松とさ  
◎非之徳へ四方の松や引かお良徳



△元方黍 △元方棚  
方角にてさきの松とさ  
◎非之徳へ四方の松や引かお良徳

狂 東方より神の早くを命月  
ととく神の内よりみは 一枝

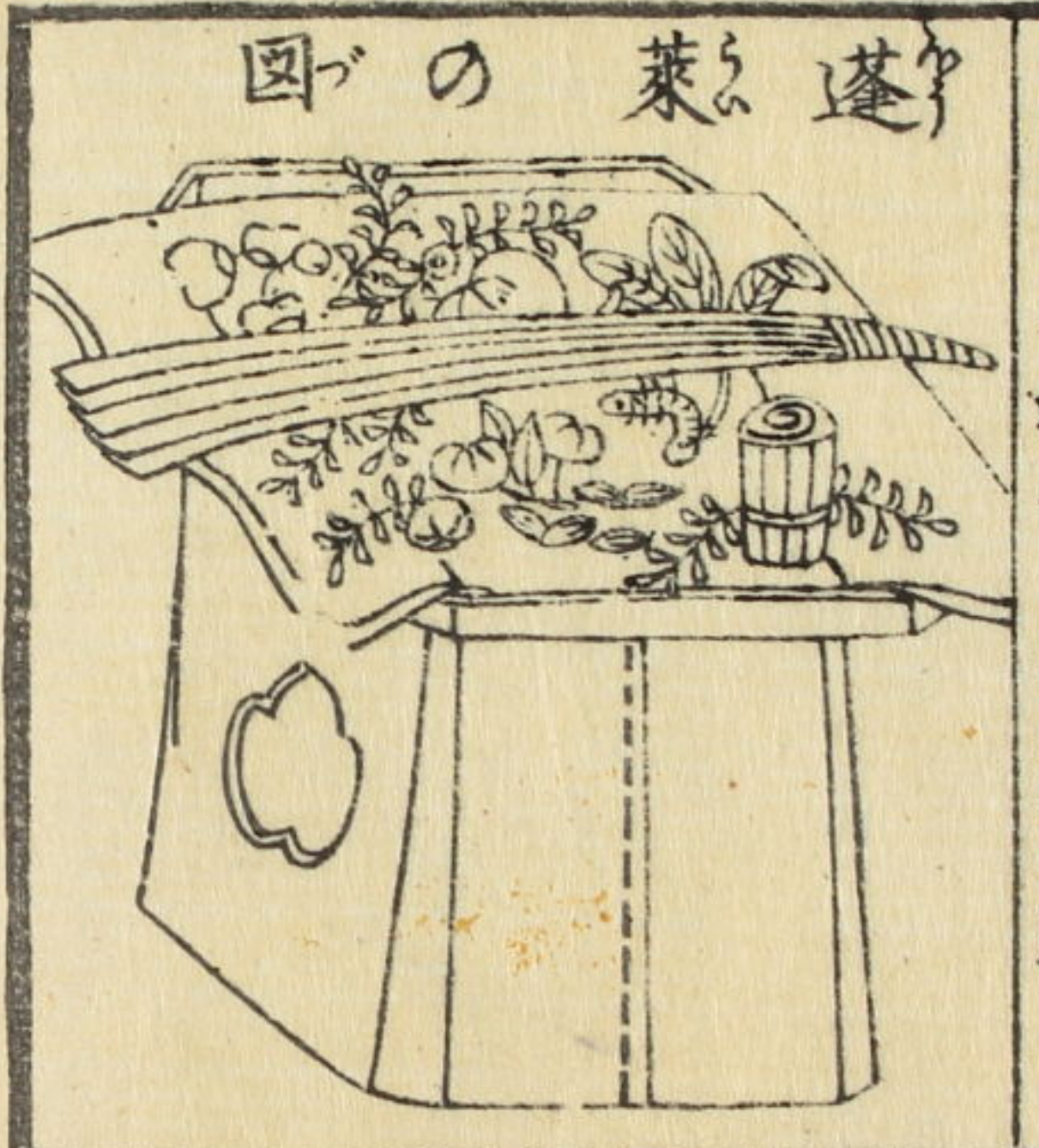
門の神棚 在家の妻戸の棚と  
かへて祭る夜に五

蓬菜いそふ  
器の灯をいそふま  
えの儀の事あり

蓬菜島の仙人の住處にて此處の  
菓物と喰へ不老不死に至ると依て

年始に命遠くと祝ひて三方ふ種々  
の物とつと重ね蓬菜と名づる祝ふ之

○蓬菜やけはよふ海とやぬ 可友  
○圖と外諸礼 家本式の通り



狂 仙家のいも乃のうまきをいも乃のいも  
蓬菜庭に着けけの 朧月山人

△蓬菜 三方の甚盛のあり  
とる所と正面とひる

△橙 実をいも乃の七八年を  
代々つく故祝の物と云

△搗栗 搗の字と勝ふくへて万事  
ふりちる心はていふ

△梅干 梅宝珠といふ  
玉の心といふ

△柑子 △ころかさ △昆布 乃  
△柚 △野老 △海老 △橘 △串柳

右の品々かざり心とよむうかざると  
春ふて元日の季より右乃内春さ  
由來のある月の次ふりくある

狂 みうさじたのくところの名  
をそとけいひしちかせいむび負持

食積 蓬菜の餅はよくかく目  
出度りの故蓬菜の積かき

○蓬菜の物を喰へ長壽と得ん心  
○あつくと答積あけはぬや 嵐雪

狂 和菓をけし蓬菜さんむらうみ  
まのいも乃のいも乃のいも乃

海老野老

二品とも老の字を  
あやうり用るる

殊小海老の腰の如くみくるもの  
よりよひ長く腰の如くも

長命のて老人事と縁を祝ふ  
非いせゑの傍りもゆし祚の春親重

神馬藻

神功皇后異国とせり  
あふら船中馬秣は

よつて海中の藻と取て馬を牧  
神馬草と名づく名はよりて年徳

神の馬ふとてこれを傍り  
又和訓小穂俵といふを以て穂も

俵もつてとれ物るるを  
ゆるるべし民俗をまうてを

つとつて非わらや 橋 冬も緑  
祝儀表とるる表禁 橋

変らず其実赤さのふらゆ  
祝ひの物とすむり 諸兄公ふ始て

橋の姓と賜ふれこれを祝して  
非橋といふとまの傍りか安正

齒朶

裏印 齒よりひともみ  
山ささいさごとくむらひ

長くえごとのづといふ意して是  
と用るる其上齒朶ハ雪霜ふも

まごど昔きりのささ 紅 親子草  
ハ春の祝ふ用るる

代々と譲り子孫長く繁栄の儀  
とつて橙紅と並へ用るる代々

るもその其内ハ死する意味あり  
死の字とすひの人の思ふべき

とも常とありて人驚く事あり  
唐小ありるる斬有十思の座敷

を建つる折節天台の淨慈寺  
ハ書記濟顛といふ僧の通る

せし主人のこそ今日家移り  
だば吉事の祝詞とて至り

議ふ濟顛よりわへど大音ふ云く  
子有て親死し夫死して婦死

此家より千口の葬と出さると  
とて走ら出られり主人甚ど怒

つて新宅の祝詞とよむふ却て死  
を以て葬といふ追ひて一棒と與  
来まじし僕母命す其中に老人有  
て申しなるいこれ大い吉語なり必  
怒りあへば子有て死せば子孫  
を絶つて夫死して後婦死せんこれ  
順道なりこの十畳の座敷よ  
て千人の葬と出さんといくた  
くれ年数を歴せんばあへん事  
にありすうは日出度語にあふ  
座敷にびつといた主人大いさ  
とうて濟顛の凡僧にあつたさ  
事とありましく尊びけるや  
るまゝとありて世間の物忌ひ  
まらるゝ公中つる一

新撰六帖

有家

春ころに色もかろぬゆつたの  
ゆめふらたとも君がとえとそ  
能ゆつりまやひか小  
家の大りなり 親重

**雑煮** 冬年の製 置る餅又  
種々の品を加へ羹とて

喰ふは其品國々家々の嘉例あ  
る大同小異ありその加ふる品を左に記  
す 芋頭大根 芋子 焼豆腐 かし栗  
昆布 ありい 前次海菜 ちりめりさ

能 牛房 あつめ 糠 田はぐり  
能 餅 織 此 雑煮 けし ち 宗阿

狂 猿 不 新 煮 と う ぬ 人 けし  
腹 の と け ち 考 と あり 人 ちりす

**羹** 祝 羹の雑々調へ煮るあり  
の依云 即 雑煮の事

祝 元日 結見 祝 元日 祝 元日  
祝 元日 結見 祝 元日 祝 元日  
云心と元日 祝 元日

**芋頭** 万事の司頭なる心と祝  
又頭と云ふ字に大學頭藏

人頭をくくろあわ人乃各ぬ  
よふ少元日は祝ふるる也

**料の** 兩のよのよ書之年始に  
遺ふ小かまけの名あり

正月日金元日前上旬 正月廿二



**大箸** △美箸と云 おききりやうふ  
年始の箸いぬとて用中

**開小豆** 豆と水煮めて大根と  
酢とくわいて雑煮

**開** 祝ふかきりついでつくと云開  
といふいたいのあかきり

**開牛房** 豆と同心く開いて血  
ふりゆへ名つくまき

**加賀御州** 大内にて餅の上  
とく大根をいかり

**煎餅** 素き茶の中は子きかみま  
やがてまのきふそあえはる

**押鮎** 鮎ハ異名年魚と云  
塩あかき年始用中事

**俵海鼠** とくごとも  
いふ生海鼠

**小殿原** △田作と云  
いかりし事なり

**海羸** 海中できり海獅の身  
元日の祝儀といふ

**螺肴** 夏とも多く  
出るりの螺肴

**掛鯛** 元日かきり  
干鯛兩尾とくけり

**とろ鯛** 元日かきり  
國小よて其例一

**葩煎賣** 昔元日かきり  
家内かきり故

**羊男** 年越の豆とまき正月の  
儀式といひ又云又其

**大服** 煎茶の名之服の字忌服  
の服乃字と不吉ゆ元

**日小立** 茶と大福とあきして祝  
大福と云ふ名は元日

**宗敏** 元日

**宗敏** 元日

**宗敏** 元日

**宗敏** 元日

**宗敏** 元日

狂春來れりさむを青もかきうて  
宿のたふくうかどみりか 入安

若水 △洗井 井華水 △若水 桶  
△初水 井開 乃事

公事小立春小くむ水とて  
連能小元朝くむ水とて

能美あけむく星の砂子冬門

福藁 △福藁 敷しむ庭  
と若物と喰入

庭竈 民家庭ふくむと若新  
庭竈

福鍋 福多とい名の若たきり  
て年始の祝詞あり

幸木 △幸籠 木の枝と折て夫  
魚鳥菜菓とけり

鬼打木 大貴王の木もいふ  
門松の影け木あり

年木とて正月始り小疵多れ木と  
とる末小葉と残り門木とせうけて  
おくく鬼打くく木とて空にけり  
とる陰氣とけりかの義あり

毘沙門功德經 多門天と  
福の神

昔陰陽師のまじり民家来  
来り札と納め御經とて又師の目  
出度とて今絶や 若戎 元朝小  
きとて今絶や 賣あり

くと買ふとて祝ひ祭るあり

非とていふ事たふく若多す右松  
え羽や休とまじり神魚星雪

狂的半はけりえりん一師と

ふ尔得くく星佛 其年の属  
多のすり春房 星九曜星

の像と星佛とていふ 懸想文

懸くハ十三ノ八ノ五ノ

懸くハ十三ノ八ノ五ノ

懸くハ十三ノ八ノ五ノ

懸くハ十三ノ八ノ五ノ

懸想文といふ元日寅の刻  
より町々を賣て通る赤き

袴立烏帽子とあつく是は  
銭とあえはまの女はあんのめで

うあふくといふて皆祝して  
洗米とあふくさるる今とて

かちささう文縁ほきの早く  
あえささうに祈る陰陽師乃

祝文なりまね元來の艶書のこと  
非人の心をあふくはけさう

任ふるさう後いししく  
狗の下まてけさうさ貞徳

初雞 元朝のさう声なり  
非一 湯不耳さうそさ風 望一

稻積 いほつと稲いりる積は  
のささほさうさぬる心あり

元日の寝ると云い説三日とも云  
非 移種や秋のま糸とさの春子周

稲あぶ 稲つむと同心をいさ  
さうさ故とさ心多さ

初夢 大晦日夜より元日あ  
つさあつるささる夢

夫木 西行

年をさぬ春来べささるの  
ささうさささささささ

三物連歌 元日宗匠の家  
旗これとりてあ

そふ者或は弟子集り句とあ  
第一句と第二句と第三句と

脇といひ第三句と第三と  
いふ三つあふさるゆへ三つ物

とつり是と板木ありて  
市中と賣する事あり合を

さ事なりといふども宗匠  
の家ふ例歳の式とさして句

と作るあり裏白連歌を  
連歌は四枚の懐紙あり中

古あやまりて片面と書脱  
又一枚と添て五枚とさせり

このゆへに片面白紙なり  
是と例としてかく名付たり

三物俳諧 右連歌の同ト又  
裏白俳諧も有

元日異名註 正月朔日と  
元日といふ

元といふ字を多しとよむゆへ  
とよめれ日といふ事へ△元三

といふ事へ年月日のちよめと  
いふことへ△四始といふ年月日

時の始といふ事を△復端と  
いふ復といふといふ字端へは

初めといふ字義あり春の四時の  
初めゆへとよめとよむといふ

事にて元日と履端といふ△新  
王乃年といふ改の年といふ

をいふ万葉の荒玉の年や  
あり玉といふゆへにたかた

内かれは年のちよめとよむ祝  
ひもあはれといふあるべし

元日 歌連俳狂哥詩手紙  
故事 いろくいづらん

家夫木 俊成

九をやましく危ふむくさの  
そをさつらるる子代の初なる

新撰六帖 光俊

今初まればうまをさあすり衣  
さるたりそむる朝のまの風

家集 元日聞鶯 西行

志あふひてまする者の松ふきそ  
まの戸あふる音乃し急

夫木 為家

年の内ふまをいふとあはれ玉の  
とよめとよむいふをいふそ

六百番哥合 慈鎮

百あやまていふうらさうのさ  
さのりふさの世の初をうつまる

拾遺集 赤人

さこのふをいふいふれがまをいふ  
ちよめとよむいふをいふ

三朝 道遠院

まかるとまをいふうらさうの代  
月見れそと免ちのほし



昨夜ニ似  
カルトナリ

詩 元日詞

蜀地寒猶

暖外地ノ中チ蜀ハ寒正朝發早氣余所ヨリ暖カナリ

梅都ハ巳ニ梅花発ケル偏驚万里蜀ヨリハ又暖カナリ

客コレヲ見テ蜀其外已復一年外國ノ旅客又驚ツ

來春ノ早ク至ル今又一年張說夕チケルカトウタガフナリ

詩 元日詞

元日賜群臣栢葉唐ノ制ニ

酒ヲ進ム又栢ノ葉ヲ賜フ武平歳時記ニアリ栢ハ仙葉ナリ

綠葉迎春新栢葉ノミドリモ春

寒椒歷歲寒冬ヲヌギ来リテ

願持栢葉壽仙葉タル栢葉ニ

長奉万年歡恩賜ノ栢葉ヲ捧

奉和正日臨朝應詔天子朝廷ニ

製ノ詩ヲ和セヨトノ  
詔命ニ應スルナリ  
揚師道

詩 元日詞

右ニ同

居間無賓客起只如常地間

住居スバ春ナリトテ賀シ来ル賓客モナク只朝トク起キ出ルハ平生モカクノト

ナリ桃板隨人換桃符ノ製モ人ニ

タリハ梅花隔年香年ノ内ヨリ發

春風回笑語雲氣ト豐荒和

ハ人ノ笑物語ルニ似タリ祥栢酒何雲ハ富貴ノ上ニタナヒク

勞勸心平壽自長心中平和ニ

ハ寿命自然ニ長クナラン仙葉ノ栢酒ナリト

詩 新歲戲作 室廬巢

莫笑腐儒生計貧儒者ハスギロ

貧シトアサケリ今朝富貴而迎笑フコト無用ト

新中々貧賤ニハナシ林頭千卷人

間樂瓶裏一枝天下春ハ余多シ

書アリテ此上ノ樂ナレ瓶ニイケレ梅一枝ハ天下ノ春ヲ迎エ富貴至極トス

詩 壬午新年 同 龍州蘆

雪後庭前柳絲黃春暗生雪ハ

ミレバ庭前ノ柳シケリ絲ヲタルハ

兼ノクセ付テアルハイヅレ春ノシルシ

ナリ預知佳客到喜鵲兩三聲喜

鵲ハ声ノヨロコバシク啼ヲキケバカ子テ

年始ヲ賀シ来ル珍客アラシトヲ知

レルトナリ

狀賀新年之文 片カナハ尺牘

喜陽之清有地之佳物中納紙

新トニ鳳紀之慶

先告知 貴一眷

健履 正一且

深為喜盛 房中無

運云依太年始陽

恙渡青 年寄賀一辭

新兆鳳紀之慶 謹献椒花之

頌三元展首祚 陽春漸次

至此 王春佳慶 歲序告新

貴眷 有屬 六戚 健履 正旦

動止佳祐亦逢春 清勝入

新年 深為喜盛 不堪欣躍

至慶至喜 房中無恙 陋巷因

舊寒舍守常 私第幸無事

渡青年 斗柄東建 轉和氣

偶致一封 投魯封 致手啓

正月 日念元日

正月 九

上慶捧半箋寄賀辭中不勝相

祝上聊此由賀上為以祝壽之

證上遲日上他日期春遊中須

約尋芳日不勝九頓中臨楷快

々上呵硯皇恐上拜替首中頓

首中不備上誠恐誠惶上死罪々

狀新年之文返事 左漢文尺牘之

為二年南之古祝詞

早辱誨章賀

新考札亦為見仕以此作

三朝

於此交日亦度中納心先以

万壽更任命 記得

長沙家内表は望遠云

貴府門庭各佳健

廣涉踈歲孫存存於約

多慶頻至將俟

承湯耐人否復修之

三春之行樂謹此伏候

早辱 中速得賜書上伏兼中

兼札示上辱枉上已蒙誨章

上教示中來書中珍牘中家鴿

三朝上履端中淑節任命 中若

諭上蒙命貴府上仙縣上錦里

中邦鄉門庭中邸第上滄家上黃堂

或人の説は年始狀の結語は期永

日之時侯あはる期永陽之時侯

と世間普通は書來ととも期永

日侯とさうして濟とさう之時

の二字重言のまうまうと

侍るとさう尤も有まうと



狀 新年自作詩哥と送る文

新屋吉地不可不修飾今納

甫歲上休兆 朝来

南枝始發年當春瑞布新栢

鶯花競妍 偶

自風一毛微毫仕以付以然涉

寄鄙詞 以投几下

月以宜夜以偏削而希以不乞

拜乞慈芬

甫歲上鳳曆中三春慶吉兆

令辰上嘉令朝来今辰發起

鶯花云黃鸝繞芳樹梅鶯映朝暉

偶強于時即偶然寄作賦

述鄙詞詞章一絶鄙語野詩

投呈汚奉告几下 閣

下座右顧盼拜 恭

謹敢以慈芥潤色斤

正請正不律不具草不宣不悉

狀 同返事

涉祝羽之玉委新梅人

采雲辱嘉辭

仕以何日發新著梅花

鶯花乘

保長用必守文以仕以

春光遲々寄即

自之佳唱之惠投之不存

事之詩章 興趣

感賞之內事不淡納在

不減古人暫留之干

中依の  
案上アノ上ニアル

采雲尺素尺書サウウンニシツ辱命ウツシメタマフ無命ムシメタマフ

嘉辞壽儀カシジニシウギ祝詩壽章シツシニシウシヤウ鶯花ウヱノハナ

云クニ花開鶯嬌ハナハクキウニウヱノメカシ景悠然カミナリニウヱノメカシ黃鳥日ウヱノメカシニヒ

轉白梅風綻マユルハクバイハカゼノハナ厚被投賜アツクニヒキテタマフ寄ヨス

即事ソコニシヨリ即真ソコニマコト對景タガヒニカミナリ任真マコトニマコト無感ムシメタマフ

興趣クニキョウ風調カゼノマツ雅音カミナリノネ不減マツル古入コトニイリ不讓マツル

暫留シヅカニトドマシ敢作家珍オウゼニシヤクニカミナリ拜置イハサグニオケテ平座ヘイザニ納賞ノウシヤウニ重オモシ

右手紙ミギテガミのまじりマシ心ココロ真字マコトジとつひツツヒ

てありこの真字マコトジ漢文カンモンを尺牘シツツクなり

如コト此コトあるアル處トコロ漢文カンモン尺牘シツツク乃ナリ

内の文章ウチノブツとゆるゆる出デ書替シヤガヒ又マタハ

異名イナミあり上中下ウチノカミナリのちノチ敬ウヤマシ方カタ同輩ドウハイ目下メゲの書シヤク併ヒラ

あう上中下ウチノカミナリ不揃フソボる事コトふりフリ見合ミアヒて書シヤク互タガヒ

歳旦シヤウタン畫雞シヤクニ絶實ツツシ傳云ツツシトイフ鶏ニ畫シヤクテ

故事コト戸上ウチノカミニ貼ニ符シヤクヲシヤクナシ

ハサメ百磨ヒャクマオノル其上ウチノカミニ葦ニノ索ノシヤク

ヲカケル之故コトニ葦ニ索ノシヤクトモ云トイフフナリ

仙木センボク桃符トウフ桃板トウイタ桃觀トウケン皆ナニ尚ナリ

テコレヲ仙木センボクト云トイフフ百鬼ヒャクキ恐オソルハ

所ナリ是ヲ元日ゲンニチニ立テテ邪氣ジャキヲ

フセグナリ桃板トウイタニ書シヤク法士ホフシ民井ミンイ

ニ儒者ニ僧家ニ文ヲ書シヤクへキ文ヲ皆ナニ

日本歳時記ニッポンシヤウジキ生菜シヤウサイ

ニ委ニシクアリ

ナドモ又菜盤サイバントモ云トイフフ松柏ソウボク椒カシ

花菜根ハナナヅメ芹セリ等ナニノ生菜シヤウサイ餅モチナドヲ

盤イタニ盛ニリテ相贈アヒタガシリシヨリ云

本草綱目ホンソウコウモクニ葱ニ蒜ニ蓼ニ蒿ニ芥ニ是

ヲ盛ヲ饌ヲ五辛ゴシン盤ニト

イフ迎新イフイニシンノ儀ノヲ取ルル

商人シヤニン清湖君シヤウコキミニ女ニヲ乞ヒト得テタリ

商人シヤニン欲ヒキモノ有リテ求メバ此コト女ヲナ

ニ、ヨラス興へスト云フコナシ依  
テ其名ヲ如願トヨテ常ニカク  
如シ然ルニ元朝ニ至テ如願ヲソ  
ク起キ出シテ商人怒リテ追打  
シニ糞壤ノ中へニゲ入りテ其跡  
カタチナシ後人細繩ニ人形ヲカ  
ケテ糞ノ中へナゲイレ令  
如願ト云フヲナシケルト

精ナリ是ヲ服スル層蘇酒ヲ

モチユル

**神奈樹鬱壘**

東海ノ  
度朔山

ニ桃ノ樹アリ大キサ三千里東  
北ニ二神アリ神荼鬱壘トイフ

ユノ神百鬼ヲクワトナリコレニヨ  
ソテ此圖ヲ画キテ凶魅ヲフセ

コレ本朝鬼門

**放生雀**

能幹  
ヨリ

ノ擡トスルニヤ

歳朝ヲ以テ雀ヲ趙王ニ獻スカ  
ザルニ五采ヲ以テス趙王大ニ悦ブ

**祈穀**

漢ノ武帝ニ始ル天子五  
穀成熟ノ事ヲ天ニ祈ル

ナリ

**粉荔枝**

米ノ粉ヲモツテ荔  
枝ノカタチヲツクリ

食スル

**折七松**

歳始松ヲ折  
ル男ハセツ女ハニッ

ナリ

茶トシテ是ヲ吞

ベト驚勤

唐ノ明皇

鬼来リテ明皇ノ玉笛ヲ又スム

明皇怒ラセ玉ヒ武士ヲ召ント

スルニ忽チ一人終南山ノ進士鐘

馗ト名乗リ以前ノ小鬼シトラ

ヘテ食ヒ殺シケルト御覽アリテ

明皇ノ御夢サメテ翌日御殿

ニ愈タリ是ヨリシテ後鐘馗カ  
像ヲ画キ又人鐘馗ノ像ニナリ  
テ正月ニ家々ヲ廻リテ祝フト  
ナリ此事唐ニモ久シク言傳フレ  
ドモ附會ノ説ナリ委ク日本  
歳時記ニ論ズ見ル正説ナリ

元日妙術 除年中病

今朝丑の時より前赤小豆七粒と右の酒かて吞へ一年中病かふ

**除邪氣** 今日菘木かと焼かけ年中の邪氣かを除くか或い煎湯かとて

吞かもよう **不老法** 今日枸杞かと湯かか入かてゆかあかすかれかんかてか光

澤かあかじかめか癩かむか老かず **治膿氣** 今日小便かと以かて膿氣かと洗かへからか有

癩疫かと辟かく 麻かの実か七粒か赤小豆七粒か井かの中かへかるかをか病か難かと除かく

**樹木** 今日鷄鳴かの比か火かとかりてかしてか樹木かと見かるかべか此か時かは

いかまかとか虫かとかもか腐かるかるか枝葉かのかあからかまかりかるか所かありか是

と取か去かるかへか一か虫か生かぜかるかこか又か元且か五更かの時か早かくか芥かと持かてか菓

れか木かとか吹かとか或かひか切かるか斯かのかとかすかれか其か年か菓か実かと結かふかと多かい

○鷄鳴かのかれか松か明か火かをかとか木かのか上か下かとかてかてかセかバか虫かとかりかセかズ

**京** 祇園削掛の神事 元朝か寅かのか日かにか火かをかうかめかとか祭か請かのか人かとかいかとか一か説かとか大

画像か開帳か ○六條道場か天神自画かの像か開帳か ○仁和寺か北野か兩所か午王

加持か ○比叡か山東塔かの修正か會か但か元日かよりか四日かまでかあり

横川か西塔か八日か迄かあり

**大坂** 天王寺講堂か秘密か供か刻かのか宝か藏かのか朝拜か刻かのか太子堂かのか法

事舞樂か刻かのか金堂かのか石米か上か刻かのか六時堂かのか重盞か中か刻かのか修正か音楽か中か刻かの

**初春之部** 日かのか定かまかりか後かにか元日かよりかありか也か

旬かのか季か乃かりかのか此かはかどか出かまかとか歳か旦かとかちかちかあかりかのかサかリ

**若餅** 三ヶ日かの内か又かハか初春かあかつか三かるかもかちかをかいか定かとか説かふ

小の餅を若餅と云小字を忌故  
非 若餅の餅を若餅と云小字を忌故

**破魔弓** 破魔矢  
破魔弓 破魔矢

ひふ勝負をあらうとむむくはり  
弓のまのびるるべし弓の神道

中に用也哥あり白虎通云云  
天子もろくろを射て陽氣を

たどけ万物小達とるこあり  
非 弓や過時わう四天王 其角

**羽子板** 胡木の子  
羽子板 胡木の子

まどろみなり秋のまどろみ蜻蛉  
とよ垂ハ蚊を食ふのなりその

形をまひて板小のせつと上とさ  
あつ時蜻蛉のこくと

詞 羽子板 胡鬼の子 胡鬼板はさ  
右もまも羽子板のこと  
△を糸つく 哥の言葉ニ用やあり

**毬打** 毬  
毬打 毬

△あつぐ玉△ゆぐぐ○毬打ハ厚さ  
板と玉の如くあり是とつて

遊ぶ子供のりてあをい物之唐土  
黄帝と云人出尤とよ入と七い

外出尤の吳疫神とるて人民とをマ  
まや故出尤が眼とるよむと八年の

初ふきちやうとつりりりや。本朝  
昔の年始上つるふてりてあまひ

故日本紀ふも出たり。万葉集は  
玉きりるといふささるは之

**宝引** 福引  
宝引 福引

△あつぐく玉と打物之毬杖  
非 券とつふ新巻とる子流り 春益

**年玉** 早春の人物  
年玉 早春の人物

**書初** 試筆  
書初 試筆

元日小より古例あり玉義之書  
初月義書あり 玉義之

日佳月來元正首  
正月の佳月來元正首

太簇告辰微始布  
正月の太簇告辰微始布

盤無不宜和神養素  
正月の盤無不宜和神養素

詩書初 世間書あり

天筆和合祭地福皆圓滿  
天筆和合祭地福皆圓滿

詩長生殿裏春秋富不若前日月遲  
長生殿裏春秋富不若前日月遲

詩佳辰令月飲無極萬歲千秋衆未央  
佳辰令月飲無極萬歲千秋衆未央

詩陽和入大厦梅萼出枝條  
陽和入大厦梅萼出枝條

詩梅自發南面香猶到東簾  
梅自發南面香猶到東簾

詩黃金自充多朱提忽納朝  
黃金自充多朱提忽納朝

詩海内太平日扶桑安靜時  
海内太平日扶桑安靜時

書初のこ

新古今

貴之

君の代の年の数と白おの

非七和や和あふ紙もゆり色支声

西より奈の我あふ系や等路梅路

西より奈の我あふ系や等路梅路

天等々産と凍て和合祭 重頼

狂八十の春と繁て 麿卿

いく子世もよふ位のはやふ初

多ふ八とだけ 去年今年

△ゆり年△よひの年△ころけ年

△千代乃を歌△君がなを

右のまは元日より年始の心へ

非花の去年今ふ初ふ初は重

球法を 年の初ふ幼女乃

頃ふ始まらるやあれど今

と世より 童女のこを

びくまきつれ里 毬打り  
あつへる物やうへり

御降 元日よふ三時日  
遠の間の雨之 **三日**

非日小日に彩とち 正月土音  
かまや二日無勝 **松の内** 追と千

五月七日の門ふぢうあつ 松内  
由之江戸の七日ふぢう **志内** か回

春永 永言永陽と云祝の詞春ハ  
日もながくゆるマウあつ心といは

非春永といふやう 非  
灼のぢう縄親重 **藏開** 非

を猫の付 **湯殿始** 歳初湯  
てつ涼戸 浴するこ

非先娘いゆふのいあ 非  
のさくことめ井志 **弓始**

正月七日の禁中御弓の奏あり 非  
去来ふんぬ教訓弓知あ五音

心先始 諸多一神代抄  
日見始とあり〇又

飛馬始といふ説用ひが〇又  
火水始是と正説と云一深秘

非ふ代万々うへ **馬菜初**  
いひめち先春可

非ふりぢふまや **着衣始**  
あつてい白可考

衣服と着といひる祝ひ之三日の  
内ふ吉日と撰んで用ふ之説

競始と書て舟より瓜ぢうり  
のり初事といひて舟菜初

各別よむきば前説を用ひ着  
衣とていふこ用 **非**

始老の飯をも **昏開** 昏見え  
のめりか玄音 秘昏と云

春駒 駒と頭といひてき舞  
禁中白馬節會ふる 非

非春駒や春子か **年禮**  
ふゆらととた伯雨

非ふんやいふとま 非  
年立や年中の礼ハ星乃牧其角

年立や年中の礼ハ星乃牧其角

年立や年中の礼ハ星乃牧其角





朝節夕節親戚宴會とて  
節振舞と云ふは往來すると云

新春の賀節を祝するに尤令節  
毎に祝ひ祝ふ事年始の限り

どと云ふ正月一年の始めなる  
少をりて格別な節といふ正月

の事とて祭といふは葵祭花と  
いふは櫻の事とするが如し

① 湯まきり系より小鞆焼りのく  
串ふもぬらる春のふりまの保友

節小袖 ① 非 湯毛とら正月まき

② 湯毛のものと云ふは湯毛小袖  
の川もまきりせすは深江夜 正信

枕飯 東鑑に云く今日千葉之  
介これに沙汰すとあり

當月武家の節といふなり  
① 節振舞ふ招く文左ハ漢文隨

枕飯 ① 節 湯毛 湯毛 湯毛

纏ひ ぬらる 湯毛 湯毛 湯毛

了 杉鳥 行 盃

欽初 ① 銅初 ① 非 正信

水祝 祝ひ 男子 水かゝる事と

これハ永祿の比松永が姪と龍臣が  
めあせしよりと云ふ ① 非

いも女房持と云 ① 吹初

あいのし 其角 ① 吹初

箏葉簫 ① 吹初 ① 吹初

尺八笛の類 ① 吹初 ① 吹初

舞初 ① 吹初 ① 吹初

正月十七日禁中



夫木

同

おとぎに絶えぬ松のまじりて  
美をそとていふ志のふあま

文治百首

定家

何ゆゑに絶えぬ松のまじりて  
美のまじりぬを驚くそあま

夫木 兼待子日 寂蓮

ふとを會ん子日のをを驚くそあま

松のまじりぬを驚くそあま

家集 社頭子日 清輔

松をいふ神のまじりぬ子日よ

さうを成子代のたつまいせん

續古 雪中子日 土御門

あゝ雪のまじりぬ松のまじりぬ

引ひぬ松乃をまじりぬ

久安百首 隆季

あゝしるまの松のまじりぬ

志の丸をふまをまじりぬ

詞引 引ひぬ松乃をまじりぬ

あゝしるまの松のまじりぬ

あゝしるまの松のまじりぬ

あゝしるまの松のまじりぬ

あゝしるまの松のまじりぬ

あゝしるまの松のまじりぬ

あゝしるまの松のまじりぬ

あゝしるまの松のまじりぬ

あゝしるまの松のまじりぬ

あゝしるまの松のまじりぬ

あゝしるまの松のまじりぬ

あゝしるまの松のまじりぬ

あゝしるまの松のまじりぬ

あゝしるまの松のまじりぬ

あゝしるまの松のまじりぬ

あゝしるまの松のまじりぬ

あゝしるまの松のまじりぬ

あゝしるまの松のまじりぬ

あゝしるまの松のまじりぬ

あゝしるまの松のまじりぬ

あゝしるまの松のまじりぬ

あゝしるまの松のまじりぬ

あゝしるまの松のまじりぬ

あゝしるまの松のまじりぬ

あゝしるまの松のまじりぬ

あゝしるまの松のまじりぬ

あゝしるまの松のまじりぬ

玉簪

たまごうすめめざらふ草ふ小松とてう  
そくて家とてなをむらと

をいふ。俊成卿の口傳小田舎母  
かひといふこととてふ初春子の目か  
簪に松をゆいうとてこういふとと  
掃くといふ玉といふあはる詞なり

蚕を飼ふ家  
の祝儀なり

子日衣

こひひの衣  
服なり

△梅の花衣 △鶯衣 △柳の衣 △鶯衣  
△鶯袖 △鶯の衣の袖なり

若菜

△千代名草 △磯若菜

△初若菜。七種若菜。十二種の若  
菜あり。七種のいづつとてかあはる

昔子の日ふつこころ中世より七日  
誹詩別して七日の古より若

菜といふも度七日の外五十七日  
貫之

春日けく若菜搦や白牡丹の  
神ありとて人のゆきん

家集

好忠

さげ若菜もさあらんやもさそてハ  
うれつじばきをさらさらの山

夫木 雪中若菜 仲正  
うつくの若菜とつむくおさる若

中系乃雪いじりけいみたり  
夫木 独摘若菜 仲正

旅子ぬまのやけけりあふあふ  
神くも人をとてさそいさうたり

御集 朝若菜 後京極摂政  
旅人々のたれれと志やし中ふ

おちぬくういあ若菜とてつむ  
万葉 若菜 赤人

あはよりい若菜つむんと志やし中ふ  
そのいもを雪はらうつ

夫木 山家若菜 兼盛  
あはよのいさうさうさあ居よハ

先人それ母さるをそほむ  
千首 水辺若菜 同

あはよのそはられさあああ  
つまぬみうてあはるさふたり

詞つむあさ。下巻。海邊磯のまか  
磯菜つむ。磯菜つむ野のむらあ



七種詞五字對句

同上

官樹千花發

九重中禁啓

階賞七葉新

七日早春還

七種菜

延喜七年より始る上の子日内藏寮内

臘司

より禁中の奉るころり或は

十二種供らるるもあり由公事根

元見へり唐土の七種の菜

羹と食してまづの病とのぞく

と荆楚歲時記より然る共

何の草といふ事と出守本邦の

七種も諸説まらくなり寛平

年中の哥母へりまづふこま

うそこづるまづふすいふ

まづしるるまづや七葉又一首

せりまづまづまづなびと仏のぞ

わさまづまづまづまづまづ

△柳の水や早芹の二種通用

まづまづまづ東風菜と名づく

哥書ふ千草といへり△まづ

いろくまづまづ本草の佛耳草あり

△まづまづ本草の繁縷あり俗

かまづまづ北国といふまづまづ

まづ○まづまづ詩經に詠する

所の卷耳あり京まづまづと録こ

のまづまづまづまづまづまづ

此二種ありまづまづまづまづ

是若菜ありまづまづまづまづ

まづまづまづまづまづまづ

本篇博物志に委まづまづ解と△

たづまづまづ和爾雅に土器草と

冬より生じて地より△單黃

花まづまづ佛の座に小児のまづ

ぐんげ花あり唐と碎菜齋と

まづ○まづまづ音齋の事あり

○延喜式七日の若菜を献せり

あり事まづまづ今まづまづ七日に用

あり事まづまづまづまづまづ公事

根源に七種の菜と食まづまづ萬

正月朔日の事

正月朔日

病を除く見へ



京鞍馬

多門

天へ

多詣

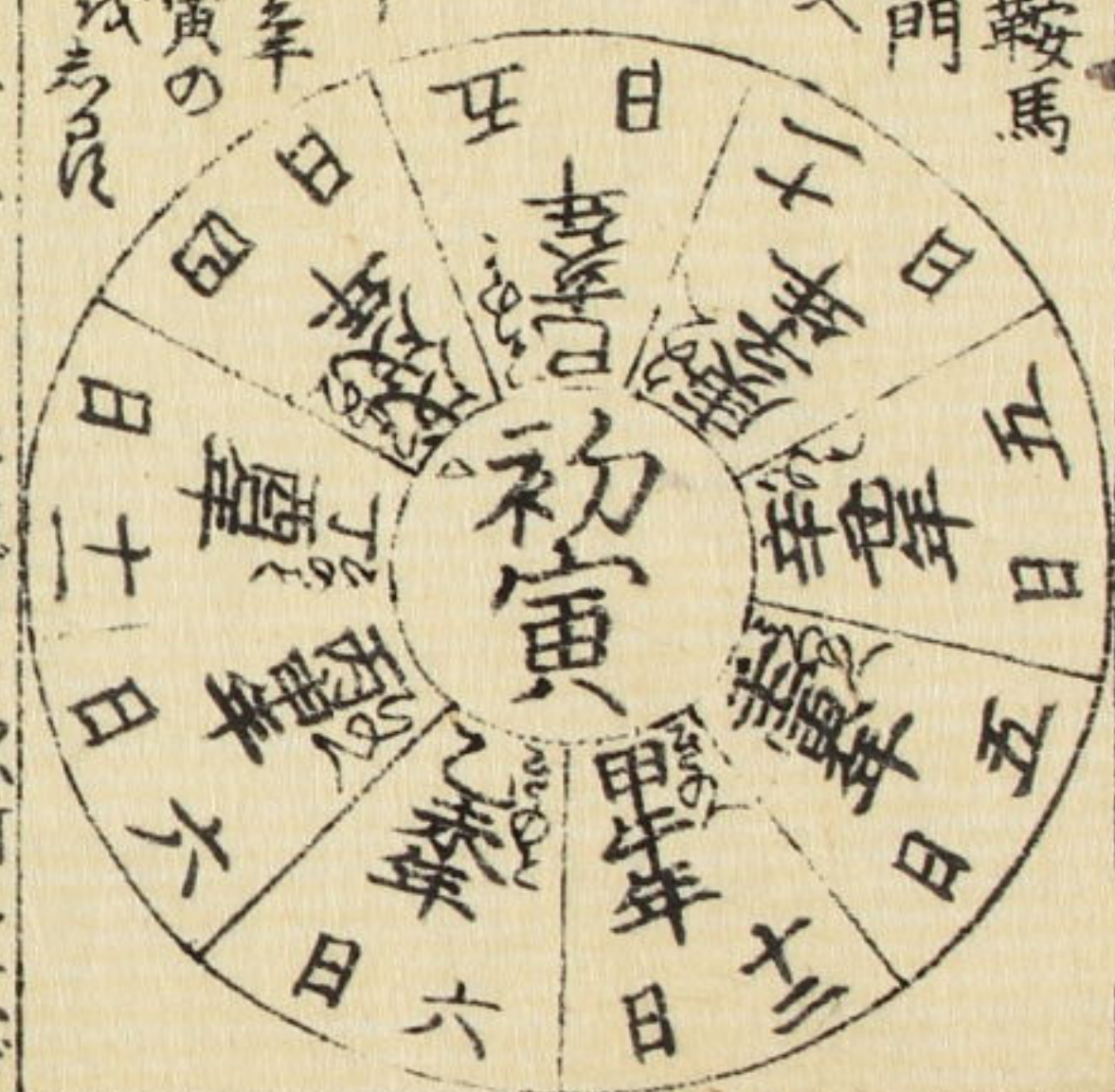
泰

多

毎

の寅

日



△ふごある一...  
△寅の日...  
△卯の日...  
△辰の日...

卯杖。御杖。卯槌。持統天皇三年  
卯日太皇尊杖十枝奉

事日本記又出たり祝杖を献

て邪氣と追打たり源氏物語

卯槌の事あり是ハ系所より献

糸そなり同く邪氣と拂

物と同時小献する事るべ

後拾遺代より年の始はる杖ハ

後拾遺代より年の始はる杖ハ

後拾遺代より年の始はる杖ハ

後拾遺代より年の始はる杖ハ

後拾遺代より年の始はる杖ハ

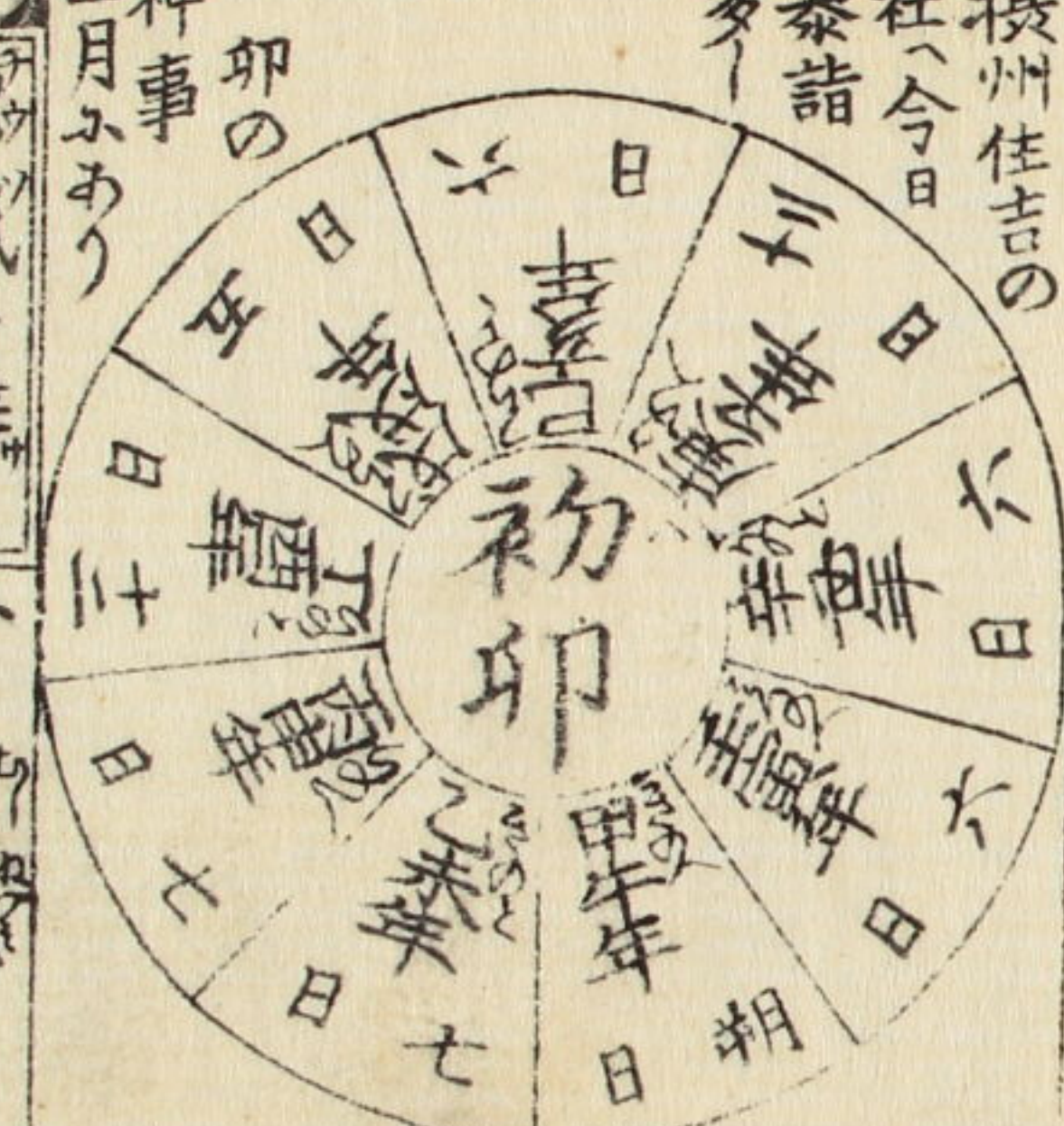
後拾遺代より年の始はる杖ハ

後拾遺代より年の始はる杖ハ

後拾遺代より年の始はる杖ハ

其外人家又害ある虫鼠の  
たぐひ再び来る事る

辰上



虫鼠を辟く今日虫鼠の  
たぐひ再び来る事る

日未上 邪氣を除く 藁火を持って井にら 願の中とて 邪鬼皆走去る

祝詞 新禧休北喜事日漸 新社駢臻無勞茲祭

占ひじて日出度事を知 二 今日て 有と云夏祭ハ龜占く 日 拘日云

二宮大饗 二宮とい東宮中 宮の御事なり

公卿以下 二宮ニ参りて 拜礼ありて饗ふ 公事 朝

觀の行幸 是ハ天子年始のこ 母后の宮へ行幸る事なり 公事

臨時客 攝政関白の家小大 臣以下の公卿を招 ちて遊びぬく定まる公務小わ

らざれ臨時の客と申す源氏 物語ハハハ客とあり御ゆふ

るど有てさいをううとハ樂器

を用ひてて 郢曲の人も 拍子 小てううといつり

梅々をううとふあハさナハゆる 詞神とつて終ひて来る太人

告朔 論語ハ朔と廣小告ふと 行事とあるして天子の 觀覽ハ

入るちり 當月の政多をゆへ今日 或ハ四日ふた日も行りたり

非 羊車行事を然るのこ 雀ける かつふのちどれ終をたむる人せ房

非 音韻のれやらの年れ云 良 摩那切始 高橋大膳の兩家

是と行ハ夜ふりこ 商初め 買初賣初家より

三日四日とるハ有 非 意あり智の智ハ

京天狗酒 正四十八

正月廿三日

正月廿三日

正月廿三日

正月廿三日



宴 六原愛宕寺門前の強刺あり  
つまりて祇園會社と定む

堂中小太鼓ありこれたてき螺  
と吹甚どさかしくさゆ天狗さり

りりつみ○東西 大坂 船玉  
本願寺松拍子 祭

船持舟玉 近江 鳥つるさの神事  
の神とある

三 今日と猪日と寸  
鳥正月二日 不成就日○今日

江戸御諷初 たり薬 千瘡万  
老松東北高砂 病膏を

銀器ふ入て天子小奉る金名指み  
つて御額并御耳のくりに付

らつとも延 京 北野裏白の連  
喜式ふ出り 歌○比叡山横

川西塔元 大坂 天満石  
三大師會 不動衆

四 今日と年月のふ○開基の福  
日 節とふ今日と年の基と開

沸 今日三月供ふる餅と菜等と有  
りて喰ふ福沸といふ祝詞入

餅の異名と福生果といふ故りらの粥  
と福沸といふや○又七日喰餅菜のかち

も福沸と云○又香 若水と湯と物と煮ると  
周々々といふかちの名と縁と

かえ開 神前吳前かちと其外家  
なりとさかお元日より

餅と供ふる鏡餅といふ今日七日  
十五日等ふとやて喰ふ開といふ

夏よりまるといふ忌何故といふ  
非今初向ふ系かちのりらかち

白髪と春 今日 京 飛鳥井家  
白髪と春の重きを の蹴鞠始

難波冷泉の 大坂 天王寺芹田  
両家皆同日 坊の修正會

五 今日と午日と守花とろみ栄地  
ある人の農人禮と勸るなり

天氣 雨れ五穀ふ 叙位 五日  
は蚕ふいあし 六日

正月由余四日五日の六日

諸臣の羊鷹を奏し次 **木造始**

弟小位と叙する事あり **禁裏の** **萬歳** 五日禁裏來行事△  
千壽万歳

とつゝたり一條院の御宇大江の定基三河守に任と其民よ

ぎへて佛教傳來の因縁をのぞき舞ひひこをさそふととたり

⑧初まのまれと名を方衆ホ 觀重

狂万歳は後ひとるが儀はぐす八百八十四文 **猿引** 是も今日やせり 不白 廻 禁中來

おえ⑨ **猿引**や猿の **京** 東福寺 引らへ酒樽様嗽石 五百羅

漢の画 **大坂** 天王寺太子堂 像掛る 生身供 音楽あり 十四日

六 今日と **六日年越** 七日八式見せ日馬日と 今日ととる

**京** 高其室寺 方丈懺法 **江戸** 浅草寺 修正會

**近江** 山王三宮七 此日 飯小登り 神事能 日 遠く四方と美

隈陽の氣と鎮ふ事を得て年中の煩悩と除くの術也と萬華谷

とて本小出たり李亮とての詩も **命駕** 外西山 寓目 眺原 疇と

作さるも ○七月と入日と云△又靈辰 此事なり とよ人の万物の灵也

とよよよとて靈辰と名つく○三 才圖會ふハ曆と違ひ今日と往

亡日と守出行と忌もれれも頼朝 出陣と諸人往亡日さるるゆゑ

とくひささざとれおれてくま亡ふと ともうして軍利ありとたり

**天氣** 風雨あま **白馬節** 災ひあり

**會** 七日 白馬と見れ邪氣と 拂ふとて 禁中ふて七日白

馬共足引く馬の陽の獸青と春の色あり故に春の始は御覽ある

あり白き月の青きあて見ゆる物  
夫より馬馬節會しつふふや

詞百支の巻下りえ。此巻より  
のる。りそる。松の茶をぞ井  
ぬき引つる。茶を。鴨。白るを  
引く夜いそる。月毛。那。重勝

御弓は奏 七日の節會。兵部  
省より奉る。天竺の

多羅葉。其長さ七尺五寸。あはは  
御弓もそれよめ。どりて七尺五寸  
うらめ。これを御弓と申す。う  
一説。御執の奏し。心をも。う

御修法 紫宸殿まで勤る。七日  
より十四日迄。東寺御

室より修行。古昔。此所。小真言院  
有て修と。今。寺。修。暫く南

殿を行ひ 今朝。今日  
なまふ。七日正月 五節。乃

ひ。正月。少陽の月。七。少陽の  
敷。今日。少陽の月。日。少陽日。故

上の朝。庭。う。下。方。民。の。う。る。ま。を。宴。會  
と。る。と。○。若。菜。の。の。つ。物。と。喰。て。子。の。日

の遺風と。る。は。△。七。草。若。菜。の。い。え。詩  
哥。連。排。八。四。十。二。目。若。菜。の。外。あり

△。七。洲。離。と。い。て。昨。晚。若。菜。と。板。小。の  
せ。て。日。本。の。鳥。と。唐。土。の。鳥。と。渡。ら。ぬ。と。死

△。七。草。を。う。け。し。し。て。離。と。い。て。鬼。車。と。い。う。鳥  
身。此。鳥。人。家。へ。さ。い。い。全。事。と。い。ふ。此。鳥。と。い。う。人  
は。う。の。心。鬼。車。鳥。の。身。八。事。文。類。聚。と。い。う。り

△。福。口。若。菜。の。心。△。若。菜。の。心。△。七。洲。の。心  
△。五。を。摘。△。齊。蒿。摘。△。若。菜。摘。右。あり

△。ぐ。の。類。つ。む。し。し。の。正。月。七。日。あり  
△。ぐ。杯。の。か。い。奥。の。草。木。の。部。委。し

春度春帰無恨春 幾年もくモ 今  
春。も。か。ル。也。

朝方始覚成人 朝日ヨリ。今日。始。成人  
人。日。從。今。克。已。應。猶。及。今日。ヨリ。人

願與梅花俱自新 梅ノ新キガ如ク  
心ヲ新メントゾ

○人日 金縷人 金糸を  
以テ人

正月七日 五十一

形ヲ作りテ是新年舊キヲ  
改メ新キニ從フノ意ニコレヨリテ

人日トストテヒトヲヨリ元日ヨリ  
歳時記ニ出六日マデ貼入於帳

ハ六畜ノ日ナレトモ今日ニ至テハ始  
メテ人ノ日トナルニハ帳ニ人形ヲ

画テ貼ルナリ元日ニ雞ヲ除病  
画テ門戸ニ貼ト同意也新新き

布の囊フクロ赤小豆盛盛てて井の  
中小置置三日三日め小取出出男ハ

七粒七粒女ハ十四粒十四粒ヲ初初初  
今年中無病無病ナリ京加茂の神事

京嵯峨始大和大和  
念佛始念佛始大和大和神事神事

八八今日今日と穀日穀日ハ  
速速き出行出行をいひ天氣今日雨雨ふ

ままハ十五日十五日も雨雨あり○月雲月雲ふれ  
りりハ春雨多多○夜參夜參星月星月の

西西ふももハ洪水洪水とと主主る  
○今雨今雨れれハ水田水田ハハ御齊會御齊會

太極殿太極殿もも今日今日よりより十四日十四日迄迄最勝

王經王經と講講ぜぜとと是是て朝家朝家と祈祈る奉

申申しし之之太極殿太極殿今今ハハ是是のの儀儀ハハ紫震殿紫震殿カ

て行てぜぜるるとと○○奉奉中中車車哥哥合合也也の

法法のの道道ととののへへてて法法者者ハハ子子代代をを行行いいの

ママククハハ百百世世傳傳ふふハハののままりりハハ此此のの儀儀也也

いいハハ此此のの儀儀也也のの奉奉真言院真言院御修御修

此此のの儀儀也也のの奉奉真言院真言院御修御修

法法今今日日よりより七日七日の間の間行行るる今年今年金

剛界剛界ハハ明明年年胎藏界胎藏界ハハ今今日日よりより七日七日の間の間行行るる今年今年金

治部省治部省カカテテ七日七日女女叙位叙位ハハ女女のの位位  
これこれとと行行るる女女叙位叙位ハハ女女のの位位  
せせるる事事ハハ叙位叙位ハハ女女のの位位  
○○奉奉中中車車哥哥合合也也のの讀人讀人不知

春春ふふハハああののままりりハハ今今日日よりより七日七日の間の間行行るる今年今年金

女女王王賜賜祿祿ハハ参議等参議等のの官人官人叙  
明門明門の内内帷帷のの座座

て女王小祿を賜ふ公事の時女王  
祿の女は字とよゆと王祿と計ふ

京 空也堂録 撰津 △篋の面  
昨七日より 薬師 月毎  
参詣多し 八日と十二

日と縁日と諸方  
も参詣あり

九日 又ハ吉日  
吉書 奏 とあつて行

大臣参りて諸国の守釣と給ふ  
て不勸の倉と開くべき由と奏す

る之俗ふつろ 西宮民家今日  
びりき是より 撰津 倉籠

十日 天気 月ハ暈あれハ春中野と  
併暈早くきあれハ早せと

○午の三刻風をばさ  
ぐる風さけきハ雨ふる 帳釘

帳書 今日明日とりて  
帳祝 賣人の家よへて年

中ハ賣物買物を記し置く帳  
面とどらるる 非 帳釘

とハ 夷祭 千日夷と 非 世々ハ  
西宮今宮代や名不

小判も春は 狂も人の怒み  
ゆ 常陸帯ハ神事 常陸

貞柳 鹿島明神の祭ハ日女の懸想人ハ  
ささあつ時その男の文ハ紙布の

帯ハりまありて神前ハ置み其  
内より反る帯と見て女のけ

帯のやうにふさしてさつら其ど  
けの男と親しくなる事ありと

無名抄ハ見へる 非 常  
ありぬ風も神おつ 東怒

十二不成 鬼宿大音とらる事ハ正月の  
日就日 始言の字と十一あり今日と云

御具足鏡 具足鏡開 元日ハ具  
足ふそるへちと繼

足ふそるへちと繼

足ふそるへちと繼

足ふそるへちと繼

足ふそるへちと繼

煮とあて喰ふし。江戸御殿中并  
小諸大名の屋形も同断かりその  
かゝり廿日大猷院殿君の御月忌  
るゆゑ兼應壬辰の年より今日か  
らうらる(非)緋威の海あかやう  
をもちろし(非)林のま木冠あかやう  
縣召

除目 今日より十三日まで三日行  
りてアガタとい郡国と申

より諸国の受領を召て官禄と玉  
をばわく申少執筆の大臣を  
て御殿の廣庇ひろびして行ゆり(前)年  
中行事哥合あはれやとみとる君きみのたさむらわ  
がこめこめゆとるゆとるあへあへああこそこそや  
ゆゆ新中納言(非)ああけけとと對たいの

事始 今日何事いいす  
仕初る帳の表書あはれ

京 柳原の榊さかき小神酒こみかづと供す  
今日と廿一日毎月なり

二十日 節といふ 天気 今日あ曇曇あ  
まま月月中中雨雨多多

登ありり晴晴きき八八月月中中雨雨多多○月月小小ささわ  
れれ飛と虫むしの類るい多たく死しと○今日  
一日いちいいりりああれれ百ひゃく兼けんよく実みのる

今日と十六日と雨あめ多たくく年中雨多あめ

解齊げさいの御ご粥じゆく 日の御座ござの大床おほど  
かかてて臺盤たいばん一脚いっくと

立て供す御粥赤あかかかいいけけ小和せわ  
布ぬの御汁物ごじゆぶつをそそへへりり三口食さんくして

御箸ごしゆしとと薬師やくし 毎月今日と會あひあひひ  
とと参ま詣ま多たく

三十日 天気 今日快晴あれれハハ 大坂おほさか △佳吉御  
毎月十日和わとと御ご

結むす鎮ちんも云い弓矢ゆみやの大おほ礼れいと  
神かみ居い皇み居い三さん韓かん退たい治ちの時とき始はじりり  
天下てんか太平たいへいの御祈ごいのり禱いたりり 南都なんと △心こころ經けい會かい

四十日 今日と俗よこよりよりのんんとととと 削花けつげ  
○かかのの子こはは年ねん天てん一いつ天てん上じやう

柳やなぎの枝えだととははつつららけてけて門かど戸かど小こささすす  
柳やなぎの陽ひかり木きののてて祝いわひひととままううるる

どどもも用もち踏歌ふみうた 殿上とのうへ地下とのしたの輩たぐひ  
るる木き多たく踏歌ふみうた 然しかるるへへきき御殿ごてん

とめぐる催馬楽とて舞ひ  
かきぐる事なり天元六年より始  
りて唐の世小長安の踏歌  
せしめ事潜確類書小出たり  
我朝の持統帝の時漢人來朝  
して踏哥と奏と此時萬春樂と  
舞ふ今の万歳はこの余風を  
これを男踏哥といふ十四日の夜より  
女踏哥は十六日の夜よりあり  
そのとよめありともいふ又踏哥  
の節會といふは京中男  
女の声なきはりて能くさうと著  
と名ははてて年始の祝詞とに  
りて舞を舞せざるも侍に  
ゆふ或時の和哥さうと又詩  
さうとふぬめしもあり源氏物語  
小竹川をさうとふこ出たり高巾  
弁小綿の花を作る是をさうと  
まこといふ又さうと小朝士の文  
をよくするめをて踏哥声調

をさうとめらると事文類聚小有  
のどしそまの十五日の夜と云  
云

年中行事哥合 貞世

そのもの声さるとをさうと  
うじのまはり月夜み

非といふを祢代ははははは其角

頭排綿 綿の作は花を冠の額  
あつてをといふあり

踏歌詞 唐張説

花萼樓前雨露新長安城裏太  
平人

今夜イロくツクリモノアリ都  
人民皆太平ノ御代ニホコルツ

龍御火樹千燈艶雜踏蓮花萬  
樹春

梅蓮ナトノ造リ花ノ燈笠  
カザリニ竜ヤ雜ナドヲ見事

二造ルニキハシキ見物ナルツ

御齋會内論議 南殿にて  
御奇會

の結願を行ひ問者講師ふと  
御前にて論議とれば内論議と

申す 十四年越 縄引ひき 縄引ひき

つみ大つまと引合ふて勝負ふつひて其年の吉凶をあらわす事なり

土龍打どりゅううち そくこひりこく 京みやこ 北野きたの 神前かみまへ

午王が持結願正月朔日 行り今日至行法終 江戸えど 谷や 中ちゆう

感應寺 大坂△生身供天王寺五日迄

の富突 五十日 今日と俗 天気 今日雨ふまは 八月十五日か

又雨ふる○天晴まは 測年之 菓大ふ熟じりるなり

豊凶 今夕月れ中する時一丈の竿と字とく月の影と

測る七尺まれば大豊年六尺も豊年九尺一丈水とまらる三尺四尺五尺の豊

養生 今夕夫婦の交を禁ざると

命短し 三球打 左義 正月 長なが 小打

さる毬打玉と真言院より神泉苑へ出とやまよる草あり 毬打玉の三角

あて天地今表しやさよる陽とまらるるの今の世民間は正月のか

ざり松竹まめあいの類とやく是とぞんどのまの唐の元日小竹とやく

竹のやう音あて陰氣とくひ妖邪の心とのぞくと本朝これよるなり

△爆竹 ともちやくとよむの又竹とわさる吉書上る書初なまはらと今日やくなり

△ひい花びら わさるあまのつとむやくと 非三越おの唐土のちれ毛あまのつとむやくと

かやれ小蛇と一回まんとく水十磨あまのつとむやくと

狂お救ふのかりとれはやくなり

けえれぞんと賑ひふたり貞柳

詩 爆竹詞シチチハ竹ノホト 黎淳

自憐結束小身材 一點芳心沫



賞<sup>カ</sup>灰<sup>ハ</sup> 芳<sup>ハ</sup>シ<sup>レ</sup>バ<sup>サ</sup>トヤカ<sup>レ</sup>ヌ<sup>ア</sup> 時<sup>ト</sup>

節<sup>セツ</sup>到<sup>ト</sup>来<sup>ライ</sup>寒<sup>カン</sup>焰<sup>エン</sup>發<sup>ハツ</sup>萬<sup>マン</sup>人<sup>ニン</sup>頭<sup>トウ</sup>上<sup>ジョウ</sup>一<sup>イツ</sup>聲<sup>セイ</sup>

雷<sup>ライ</sup>音<sup>オン</sup>來<sup>ライ</sup>リ<sup>テ</sup>火<sup>カ</sup>ニ<sup>カ</sup>リ<sup>テ</sup>松<sup>マツ</sup>竹<sup>チク</sup>ノ<sup>ノ</sup>鳴<sup>ネ</sup>ル

御<sup>ミ</sup>薪<sup>コ</sup> 百<sup>ヒャク</sup>官<sup>クワン</sup>悉<sup>シツ</sup>ク<sup>ク</sup>薪<sup>コ</sup>を<sup>ヲ</sup>奉<sup>ホウ</sup>マ<sup>テ</sup>官<sup>クワン</sup>

民<sup>ミン</sup>の<sup>ノ</sup>け<sup>ケ</sup>も<sup>モ</sup>旅<sup>リ</sup>ひ<sup>ヒ</sup>み<sup>ミ</sup>たり<sup>リ</sup> 家<sup>カ</sup>尹<sup>イン</sup>

赤<sup>アカ</sup>豆<sup>マメ</sup>粥<sup>カク</sup>祝<sup>イハヒ</sup> 紅<sup>ベニ</sup>調<sup>テウ</sup>粥<sup>カク</sup> 紅<sup>ベニ</sup>調<sup>テウ</sup>粥<sup>カク</sup> 祝<sup>イハヒ</sup>

清<sup>セイ</sup>火<sup>カ</sup>網<sup>マウ</sup>言<sup>ゴン</sup>枕<sup>シヤク</sup>草<sup>ソウ</sup>紙<sup>シ</sup>ハ<sup>ハ</sup>十<sup>ジュウ</sup>五<sup>ゴ</sup>日<sup>ニチ</sup>ハ<sup>ハ</sup>リ<sup>リ</sup>ハ<sup>ハ</sup>カ

粥<sup>カク</sup>木<sup>キ</sup> 十<sup>ジュウ</sup>五<sup>ゴ</sup>日<sup>ニチ</sup>ハ<sup>ハ</sup>リ<sup>リ</sup>ハ<sup>ハ</sup>カ<sup>カ</sup>の<sup>ノ</sup>如<sup>ニ</sup>キ<sup>キ</sup>物<sup>モノ</sup>を<sup>ヲ</sup>食<sup>シ</sup>ス

平<sup>ヘイ</sup>岡<sup>コウ</sup>の<sup>ノ</sup>御<sup>ミ</sup>粥<sup>カク</sup> 河<sup>カ</sup>内<sup>ネ</sup>国<sup>クニ</sup>恩<sup>オン</sup>知<sup>チ</sup>平<sup>ヘイ</sup>岡<sup>コウ</sup>の<sup>ノ</sup>

田<sup>タ</sup>島<sup>シマ</sup>の<sup>ノ</sup>吉<sup>キチ</sup>凶<sup>キウ</sup>と<sup>ト</sup> 上<sup>カミ</sup>元<sup>ゲン</sup> 今<sup>イマ</sup>日<sup>ニチ</sup>と<sup>ト</sup>ハ<sup>ハ</sup>元<sup>ゲン</sup>夜<sup>ヤ</sup>を<sup>ヲ</sup>

七月<sup>シチゲツ</sup>十五<sup>ジュウゴ</sup>日<sup>ニチ</sup>と<sup>ト</sup>中<sup>チュウ</sup>元<sup>ゲン</sup>と<sup>ト</sup>十<sup>ジュウ</sup>月<sup>ゲツ</sup>十五<sup>ジュウゴ</sup>日<sup>ニチ</sup>

下<sup>ゲ</sup>元<sup>ゲン</sup>と<sup>ト</sup>ハ<sup>ハ</sup>唐<sup>タウ</sup>の<sup>ノ</sup>今<sup>イマ</sup>夕<sup>セキ</sup>燈<sup>トウ</sup>籠<sup>リウ</sup>と<sup>ト</sup>

多<sup>タ</sup>々<sup>タタ</sup>と<sup>ト</sup>り<sup>リ</sup>甚<sup>シ</sup>あ<sup>ア</sup>ら<sup>ラ</sup>ず<sup>ズ</sup>き<sup>キ</sup>事<sup>コト</sup>と<sup>ト</sup>

本<sup>ホン</sup>朝<sup>テウ</sup>中<sup>チュウ</sup>元<sup>ゲン</sup>の<sup>ノ</sup>夜<sup>ヤ</sup>は<sup>ハ</sup>是<sup>コト</sup>と<sup>ト</sup>花<sup>ハナ</sup>燈<sup>トウ</sup>々<sup>タタ</sup>と<sup>ト</sup>云<sup>イハス</sup>

大<sup>ダイ</sup>樹<sup>ジュ</sup>銀<sup>ギン</sup>花<sup>カ</sup>合<sup>カウ</sup>星<sup>セイ</sup>橋<sup>キョウ</sup>鐵<sup>テツ</sup>鎖<sup>サ</sup>開<sup>カイ</sup>

暗<sup>アン</sup>塵<sup>ジン</sup>隨<sup>ズイ</sup>馬<sup>バ</sup>去<sup>キ</sup>明<sup>メイ</sup>月<sup>ゲツ</sup>逐<sup>ジュク</sup>人<sup>ニン</sup>來<sup>ライ</sup>見<sup>ミ</sup>物<sup>モノ</sup>

行<sup>カウ</sup>歌<sup>カ</sup>盡<sup>ジン</sup>落<sup>ラク</sup>梅<sup>バイ</sup> 衣<sup>イ</sup>服<sup>フク</sup>皆<sup>カエ</sup>美<sup>ミ</sup>廉<sup>レン</sup>ナル<sup>ガ</sup>

玉<sup>ギョク</sup>漏<sup>ロウ</sup>莫<sup>バク</sup>相<sup>シャウ</sup>催<sup>サイ</sup> 金<sup>キン</sup>吾<sup>ゴ</sup>ハ<sup>ハ</sup>御<sup>ミ</sup>門<sup>カド</sup>ヲ<sup>ヲ</sup>守<sup>シ</sup>ル<sup>ル</sup>官<sup>クワン</sup>

上<sup>カミ</sup>元<sup>ゲン</sup>故<sup>コ</sup>事<sup>ジ</sup> 唐<sup>タウ</sup>土<sup>ト</sup>ハ<sup>ハ</sup>今<sup>イマ</sup>夜<sup>ヤ</sup>

ナド、云<sup>イハス</sup>テ<sup>テ</sup>燈<sup>トウ</sup>ヲ<sup>ヲ</sup>点<sup>テン</sup>シ<sup>シ</sup>賑<sup>ニギ</sup>ハ<sup>シ</sup>シ

キ<sup>キ</sup>一<sup>イツ</sup>本<sup>ホン</sup>朝<sup>テウ</sup>ノ<sup>ノ</sup>中<sup>チュウ</sup>元<sup>ゲン</sup>ノ<sup>ノ</sup>夜<sup>ヤ</sup>ノ<sup>ノ</sup>如<sup>ニ</sup>シ

百<sup>ヒャク</sup>枝<sup>シ</sup>燈<sup>トウ</sup>

唐ノ世ニ韓国夫人百枝燈樹ヲ燃セシ故事之天竺遺事ニ見タリ

**士女遊** 唐ノ世ニハ今夜宮女ノ遊行ヲ許ス街衢ノ

燈火白昼ノ如シ士女一人モ夜行セスト云フナク車馬路ニ塞カルト

靈異小説 **傳柑** 今日唐ノ世ニハ二出タリ 貴戚黄柑ヲ

贈ルヲアリコレヲ **虹橋ヲ架** 怪

録ニ云ク唐ノ開元ノころ正月十五日帝葉仙師ニ宣ク四海ノ内何

レノ所カ極メテ麗シカラント仙師答ヘテ廣陵ニ踰ルヲラジト帝ニ

夕何シノ術有テコレヲ見シヤトアリシ時俄ニ殿前ニ虹ノ橋アラル

ヤガテ大真并ニ高力士黄香縹樂官數人ヲ從ヘ歩シテ橋ヲワ

タリテ行幸アリ俄頃シテ廣陵ニ至リ玉フトアリ

**花燈** 唐ニハ今夕燈籠ヲ多クトモレ舎刺ヲ拜ス也

○至道元年燈夕太宗御樓是夕花燈非燈夕ノ舍利ハハレて松の花杜吾

**京** 加茂左義長並ニ神事○嵯峨秋迦開帳ノ八幡厄神祭 十五日迄

**伊勢** △獅子頭神事 山田度會郡ニ獅子頭ニ神体トシ十四日午七日迄祭

**駿河** △御穂祭 三保大明神是三日穂津媛命ニ祭ル十四日ヨリ十六日迄ナリ

**養生** 今日大酒といふは又夫婦の交すべし

**天氣** 今日西南の風と入門風と云ふ豊年のあらし

東南の風もよ西北の風も早とつとささる暗天も早も

**女踏歌** 十四日男踏哥の如し京中ハ男女

声よく哥とくふを覺されて羊始の祝詞をつらあらい和

正徳五年八月廿六日

哥と云ふ詩をうらぐり  
走

**百病** 既小本篇博物筌  
入に見へり ○西京雜

記云く執金吾の宮中の者の  
夜行を禁ずる官々今日勅して  
前後各一日間禁とゆるらる  
これを放波といふとまこと見る

時ハ唐土も此事有る  
非菽分そいふをたれが  
狂殺入箋け付るれやうれく

どら一二とあり  
京 永觀堂大般  
若轉讀

頼朝卿の世ふ始る ○加茂神事  
○北山石不動叅 ○千本焰魔堂

叅 ○大原野春日の宮 ○  
差峩焰魔堂六奇念佛 **江戸**

焰大叅 ○増上寺山門開  
釈迦十六羅漢を拜せし **大**

**坂** 天王寺射場の弓とめ ○同  
所金堂大般若轉讀 ○住吉

甘菜の御供神  
殿に御精進供あり  
外々に御供あり **明神々詠**

いよの園うみ秋のうもそも  
口是はなれせとまふとて **十六日**

**櫻** 伊豫の国道後の左の方山  
越村といふ所の了恩寺山ふ有

山ふ登るは左の方林の中に有  
て毎年正月十六日小花咲くゆへ  
名つくむく此山に花と愛むる翁  
あり実うえのさうあると老後ふ

及んで春咲く花も心せよ吾よ  
ひ八旬ふあまれば此春花咲頃ふも  
逢ひかゝるとかたわれば花さ  
ら咲く時是正月十六日あり

それよりして年毎正月  
十六日小花さくとあり

**十七日 天氣** 今日と秋の日と  
晴天ふれ秋ふ至て五穀

正用... 豊作也大雨あり秋洪水あり  
曇る秋作不宜昼々晴る害甚

京 禁裡伶人の舞御覧并に  
鶴庵丁大隅高橋隔年小

大坂 天王寺東照宮御  
法楽同所金堂

江户 上野御祭詣  
御監宮御弓 御糺束にて

養生 今日怒り  
賭 事といひ

弓 天子弓場殿にて弓を射  
あそぶ其負うる方小射

酒と賜ひ勝る方より舞楽と  
奏す大く近衛の官領えり事

大將射手小饗を賜ふ  
是とかりあそぶといふあり

年中行事哥合 よみ人志次  
棒弓射子の司候ははまき

かたりあそぶを氣文ことか  
来春を棒はまき引つきて

けむの心ふすゝめとすの頭仲  
能きを射るはまきや二人張友静

京 禁裡の左義長○山崎室寺  
鬼○壬午六社大明神祭○

大坂 天王寺太子堂踏哥節會  
○新清水寺観音供

不成 八幡厄神祭 今日まで  
九日 参詣蘇民持束札守りと

京 天王をまじり情を得ぬい汝う子孫永く  
災難をまぬく孫といふれをけり

吉田社清坂 厄神とくふ事あり神  
衆固十六本の御多し

法然上人御忌 今日九五日迄  
執行せしむ

能人の世乃どろろ月は共角  
種蒔む法然を華から山移竹

光秋收日 晴天をいひ百菓  
日とり下 天気 熟

女鏡臺祝 皆ふ祝ふ事甘甘と初顔  
と守音同しき故此祝と

習名う女人の鏡臺小供下  
餅と今日も喰ふまきり 今日

骨正月とくく大坂杯おも今日  
塩魚の骨は大豆酒のめと煮食ふ

北日團子 今日だんご喰ふ山名  
つく。唐土江東とく取

今日紅の糸はく剪餅とつるさこ  
屋根の上はねとこれと天穿と

名はくさるり。拾遺記に見えこ  
り北日だんごはくくくも是

江戸 諸大名将校東  
ふて上野茶詣

下交 嚴島祭 安藝の國。市杵嶋の神  
云地景の美多改名つく

北一 天氣 風雨と主る日之風多け  
雨ち若晴くは異日風雨く

内宴 仁寿殿と行り文人お  
題を賜り詩と作と御

前も講せふと之(お)年行事寄合  
子子振林の息けその如くや

花をみゆたの 京 伊勢祭主柳原  
の神小御酒と

供せらる。○本国 高輪恩淑  
寺。日朗法會 門堂富突

二廿 京 太泰聖徳堂法事○大原野  
春日社祭。西園灰形祭

大坂 天王寺太子堂 三廿 京  
月次の法事 樂音

東山善正寺 四廿 京 川篤祭  
愛宕泰次

江戸 増上寺上座法問 諸大名  
御發策

五廿 養生 今日房 天氣 月小量有  
事とし 樹小虫多

京 北野法衆 御忌 法然上人  
連哥毎月 御忌日  
知息院光

明寺黒谷智因寺 百房  
浄花寺四ヶの本寺は於て  
法事あり十九日より今  
日までにてけりせん

京北野 江戸湯嶋 六廿 京 西田下津  
大坂天満 別多 林神事能

正月五日 世間 晴

井不成 泉涌寺舎利會

就日 京 西の田牛ヶ瀬祭

八日 江戸 目黒不動 大坂 北野石不動

晦日 天氣 今日風雨 清水寺の連歌

白髪と除く 今日井華水と少く

月令 此部ハ日の定すう正月の事ハ初春の元日次出也

外記政始 外記ハ恒例臨時

の政事と執行官なる人正月の當年の政を行ハ始る義あり

店卸 惟祝ハ同類 非一奉

傀儡師 傀儡ハつとよハ 驛舎の留女の遊女

とくハたつたつとよハ人形とまりて其々つの留女の身なりと

詞 ちこまハ一山揃つてハ志むの昨

非箱ハ結て表せぬ猶や傀儡師波上

夷廻 傀儡師の類ハ初春ハ夷

初芝居 昔ハ芝の上ハて見物ハ

三節 正月元日 七日 十五日

歳旦開 宗匠家ハ正月吉日

正五九月説 本邦專此三月

慶賀の事と也

或ハ親族相識宴會と云々唐  
不てハ此三月官小登らむ萬の  
事に用いむ五雜組小見  
えり清波雜志小曰く佛  
法此三月と清素月と  
名附て殺生とかくかた

正月衣服

上つるふりぬい  
服小のさうて定む

櫻衣 表白うしろ柳衣 表うしろ裏あは色  
李三月

上つるふり正月右のいろとや  
たゆハ正月の氣小應する色ハ

當月綿入を着るを以て正とす  
袴ハ柳色なり是元素袍の製

瀬うしろ女衣服 上うしろ着地うしろ黒うしろ白うしろ  
地紅下着ハ白

むくはうえり浅黄の小袖と着か  
さして間着上着皆りそ裏ハ

きるも初春の粧うしろいろうしろびうしろら  
うけハ松竹の繪と縫うしろようしろべうしろ

時令

此部ハ初春の時候  
小のさう事と出と

初春

春立日より三五日のあ  
りてハ早春と同心之

連梅や咲花のおとらん子代の着  
非うしろきうしろやうしろきうしろるうしろづうしろ渡うしろ久うしろ一うしろ晋うしろ子うしろ

兼久百首 初春日 忠房  
かゝ衣うしろまうしろくうしろらうしろまうしろねうしろとうしろまうしろらうしろ

田うしろのうしろううしろらうしろくうしろとうしろぬうしろれうしろらうしろらうしろ

万葉詠鳥

おるびきまうしろまうしろあうしろけうしろしうしろ我うしろ門うしろのうしろ

建保百首

家隆  
おもうしろとうしろけうしろまうしろのうしろあうしろぬうしろみうしろううしろけうしろ

おうしろ松うしろがうしろえうしろみうしろくうしろぬうしろあうしろくうしろあうしろ

續古今 初春霞 為家  
深うしろみうしろるうしろ毛うしろ履うしろのうしろあうしろいうしろりうしろまうしろにうしろ

まうしろこうしろふうしろらうしろううしろとうしろけうしろてうしろりうしろまうしろんうしろ

草庵 初春鶯 頓阿

雪の去ひけをどりのたれ竹ふ  
一と明きいさやうのらん

柏玉 初春海 道徳院

波風孤さうけがらて四つ海の  
我さう物なうまやたうらん

詞を廢すのとけさみくらぬさ  
日廢心長閑 廢ま物なうまや  
さうぬさうらん 雨さうらうとめさ

春本 風のどろろる。春の神風。星  
りどとさうる そん元日は四方  
はくはく 煙民のなまぐへん 夕けの

きさう。廢そふ。妙とけ物。曉撲  
さうとむ。薄の声。春とけら。声

れ名の春と若る。朝天け戸の明て  
のとけさ。初日終廢む。年改まぬ年。

年立ゆる。年のちいぬ。まぞとらう。  
いよるさうつる。さのささきたうり

久と。春あうまの春。まはた下地。  
ちよの神去。春いさひさう。まぞ立

らん。春の春。山雪かきむ。風のど  
ろる。出る神日の廢む。海邊波は

む。風のどろろる。磯ふらむ。遠修  
廢む。波風のどろる。出る初日乃

むとむ。初年さむ。水辺氷とくか。  
氷のひまの打ある浪。さうの神也。

あやむ。野下りゆる春。春開か  
る。木このめきある。風志けら。

折廢むらむ。松門の松。一はのさ  
梅花とけら。雪のうらうらう白。

咲物。初とらう竹異竹の神。  
よ明きいのどろる。竹の春はさう

さそえらる春を。草は初ら。下  
めさむ。宮開かある。氷砂とらる。

ある。春風はらる。谷け戸出る。花葉  
さぐれらる。今初より春。世  
治まる代のま。清代のま。神林  
代も日と春。神代にさむ。  
るさう子 展蘇 なるまむ。衣を衣  
ささう。廢の衣春さう。人春の



りろ人。神祇つゝ終て行く。人の心  
此のころる。佐徳姫。神姫の言降は家  
おとて。神ゆゑ。小春の春はけり  
都るこの春。九きね云。たの都の  
初春。垣かたねのまりえ神。音  
まのたあ。の久く。天の雲。天  
の。雲。井。よの春の。ひる。のろ  
ころ。と。は。ひ。ま。ま。

① 山依のあひだ。と。め。と。ま。く。時  
門。出。も。と。れ。け。い。あ。の。ま。い。ま。信徳

○ 初春早春の題。立春の哥よ  
み。さ。ら。ら。ら。や。は。と。い。も。立春の

題。初春の哥。識。な。り。守。立春  
と。い。春の節。一日。よ。か。さ。る。く

早春 ④ 万葉  
お。ま。く。も。も。え。る。柳

雪の。と。め。て。か。く。く。あ。い。を。た  
拾玉 雪中早春 慈鎮

田。あ。れ。が。く。ま。ま。の。雲。は。こ。も  
雪の。く。み。を。た。ふ。ふ。ん。れ

州庵 早春水 頓阿  
山川の。あ。れ。た。波。を。く。く。を

ま。く。ま。く。り。あ。る。は。り。ふ  
夫木 曉神祇 家隆

神。の。ひ。月。は。あ。さ。え。て  
と。う。れ。ま。る。ま。い。と。ひ。く。く

同 名所早春 如願  
相坂や。く。見。も。あ。ね。枝。は。葉。に

あ。く。あ。く。あ。く。あ。く。あ。く。あ。く  
宝治哥合 早春霞 信実

朝。あ。く。せ。も。ま。ま。あ。く。玉の  
と。は。い。ま。ま。く。と。の。け。れ。を。れ

詞 霞ふたり。清み。と。う。音。を。け  
う。君。げ。あ。く。あ。く。清。き。と。ふ。る

風。あ。く。春。来。て。も。春。の。あ。く。ま。る  
流。も。た。ま。く

能 雪の。ゆ。き。あ。く。柳。は。葉。其。角

狂 あ。く。玉の。春。を。く。く。あ。く。ま。る  
水。の。粒。紋。は。く。く。あ。く。あ。く。漱。口

詩 早春詞五字對句 同上

物外山川近 風光新柳報

春初景色新 宴賞百花催

早春花作 暢諧

獻歲春猶淺 日教程アラス 園林

未盡開 百花ヲ催シテドモ 雪和

新雨落風帶舊寒來 雪ハ雨ニト

識早梅 飯雁早梅ニテ春 生涯知

幾日更被二年催 ル世二年ノ

老衰ヲモヨフスナリ

餘寒 春小多クテさむらひ云

非 春のいさよつと風ふきまふ 鳥又

沙汰あま日の長ふあつ 鳥又

宝治百首 入道太政大臣

貞應百首 為家

美草つひは辺の氷急中して

柏玉 餘寒雪 後柏原院

玉吟 溪餘寒 家隆

千載 餘寒月 為尹

詞春雪 春の渡君氷あり

山風 雲川 池

...

...

...

...

...

...

...

履もぬぐふ火 雪霽梅先發 山河雖度臘 春寒柳暗催 雨雪未知春 詩 餘寒 五字對句 同上

石門斜日到林丘 難所路ヲシギテ日カタク 疲馬山中愁日晚 孤舟江上畏春寒 春風寒

澗道餘寒歷冰雪 門不開 詩 餘寒 七字對句 詩 礎

畫閣餘寒在新年 舊 燕歸 寒ツヨク春ノケシキナ

詩 餘寒 詞 張起

梅花猶帶雪 未得試春 衣 春半ニ至レトモ雪イマク 消ヘズ冬ノカサ子ギノ一ハ

狀 餘寒之文 暎也 天牘ス

項日 倍 春 寒 起 居 如何

起 居 如何

客作哉候山く之

千嶺

雪未不消一の電音

積雪

須二弄翫

去遠奈仕ひる

麗藻

吟々々々々々

新賦

譜示

夜存存い

不樹

尺牘 秘華七書替と記と

頃目

多日 倍春寒 上 曆春猶寒 中 新成 中 數日 味知暖 中 花邊管 中 青體盛壯 中 平安 下 無事 下 無恙 千嶺

起居

下 無事 下 無恙 千嶺

積雪

上 嶺自雪 中 宿前雪景 中 雪消露 中 殘雪皎々 弄翫

想像

中 退 上 麗藻新賦 上 法輪成 中 眷々 中 新詩龍劍

請示

中 櫛示 中 曲許 中 請惠 中 授擲 不佞 中 野生 中 小子

狀 餘寒之文返事

尺牘 漢文

如々々々今喜味和氣

若諭雨雪未散

山林閑寂詩人感興

存望中有詩料而

恥無著述

得暖手ひはるひ入ひ

得暖 御問焉

三月 詩集 餘寒 五十七

尺書啓並ニ  
廣上中下ラ記  
若論  
教示  
蒙無命  
兼告

兩雪未散  
凍雲未晴  
氷雪  
幽林  
詩人  
古調

遂深山閑寂  
寂寥  
詩人  
古調

感興  
吟趣  
存望  
直若見  
詩料

無著述  
他日  
異日上諭日  
向來  
逐斷

得暖  
候  
往問  
叩謝  
問尋  
往訪

○年内こそ立春の節より  
の餘寒とわくべし正月元日に  
ぎいとも立春の節より前あつた  
餘寒とつゞく座くらげ。今春  
寒氣つゞく座くらげ。座くらげ  
○二月たりともゆれに餘寒と  
わくべし。能證に餘寒とつゞく正  
月の季より哥に春あり

### 春雪

△あつた雪のつゞきも春ふ  
ふ雪といふあり

△残る雪 春雪と同じ事あれども哥  
にゆきといふ雪を多くしめり

拾遺 梅の木それとも雪のふりここの  
あまなる雪のふりてあまなるは

散木 山家春雪 俊頼  
ふりてあまなる雪のふりここの  
あまなる雪のふりてあまなる

万葉 今ささけをふりてあまなる雪の  
あまなる雪のふりてあまなる

建保百首 春雪 定家  
ほろの今もあまなる雪のふりて  
あまなる雪のふりてあまなる

新古今 二月雪落衣 康資母  
梅りて風もこもやあまなる雪の  
あまなる雪のふりてあまなる

新拾遺 野春雪 覺譽  
あまなる雪のふりてあまなる雪の  
あまなる雪のふりてあまなる

詞 春の雪をふりてあまなる雪の  
あまなる雪のふりてあまなる

春の雪をふりてあまなる雪の  
あまなる雪のふりてあまなる

のよきあきつて... 春雪 春の雪

連 春の雪の... 春の雪

狂 春の雪の... 春の雪

詩 春雪五字對句 同上

春雪盛山淺 海暗雲無葉

夕風輕地寒 山春雪有花

詩 春雪七字對句 詩礎

宮室雪花齊紫閣 春雪闌

閑河春色到青門 雪輕

前庭花少春空度 帶雪妍

後嶺雪深月更寒 雪不寒

詩 殘雪七字對句 詩礎

湖添春色消殘雪 映新陽

江送潮頭涌漫波 又々時

遲日未餘消野雪 對南樓

晴花猶自犯江寒 雪中春

詩 韓舍人書齊殘雪 戎昱

風捲黃雲暮雪晴 江輝洗盡柳

條輕 暮風 雲吹 柳 簷前

數片無人拂 又得書 愈一夜

明 殘雪 入 却 春 雪

雪解 雪解 雪消 雪消

三月十日

新古今 前参議教長

りか搗神とそる雪る春日の

とふ火の人の雪乃むら踏

草菴木未はいたと見よとくは

らん春に消ゆをたの言頼所

詞名る。雪けけ。雪消る。雪の

とる。雪とる。のころ。雪

非名る。雪とる。雪とる。雪

狂。雪のり。雪のり。雪のり

とく。雪のり。雪のり。雪のり

詩 雪解五字對句 同上

送寒餘雪盡 寒雪多秀水

迎歲早梅新 碧洲盡清流

湘潭雲盡暮山出水乱流

巴蜀雪消春水来山更春

雪類附 雪の山よりく

乃あふ山の麓と通らば高根

山下の様子と尋ね合せ油断

く通るべしとてて峯高

根の雪解上より雪もあせと山

の肌峯より解落る雪水を

ひ山の肌と雪とをを切てる

時へ裾へるたつる冬より積

たる雪をたの磐石の如くさ

それふうくも死とる事多し雪

さざれくもは瞬目の間も落る

北陸越後あつる越前近江の

境ふ甚しとくくても雪国高山

の所母て心 春氷 春のつる

得て歩行へ 氷りると云

又春風よその行く心をもよ

新古今

藤原秀能

夕月夜改らるるに新波江の

芦れつるをのあつるあつる

詞 氷のくさくさ小川。為氷。氷の  
水の白玉。おひる。春風。氷のくさくさ

詩 春水七字對句 詩 礎

引水 忽驚氷滿澗 水重文

回田 空見石和雲 引溪長

殘氷 春小氷のくさくさ氷  
との御傘と云書ふ 氷重と云

氷解 建仁哥合 家隆

氷 氷のくさくさ氷のひま

詞 氷のくさくさ。わたとくさ。氷のひま

非 氷のくさくさ。氷のひま。春風。池の

連 氷のくさくさ。氷のひま。春風。池の

詩 氷解五字對句 同上

鳥 飛林覺曙 風兼殘雪起

魚 躍水知春 河帶斷水流

詩 氷解七字對句 詩 礎

三代 樂回風入律 水初綠

四 溟歌駐水成文 水知春

詩 氷解詞 儲光義

洛水 春冰開洛城 春樹綠

樹林 好景色 朝看大道上落

花 亂馬足 落花馬蹄

山笑 初春の山の姿をいふ  
春の山の草木をいふ

詩 春山 冰治如笑



山の草木もまがけ流口をまて山の姿もこぼれ笑ふやうなる物と云ふ

**日待月待** 九三夜廿六夜毎月 此事とあす人も秘

と別して此月祭つゝはらう事を天地月日と祭つゝの都て天子

の憚りせぬ事して常人の祭の借踰の罪甚し天子の天地

をり諸侯の社稷を祭り大夫の五祀を祭つゝ況し庶人を

教へ恐るゝ事し非礼の祭りをあす人の福あはして禍あり若

叛の礼はあはれ祭らへて歌ふる人の沐浴齋戒して朔日は朝日

とすゝ十五日月と拜せり理ふゝて害さるゝべし供物等用

ゆる事かゝる江戸にては三百廿六日高輪 鉄炮洲にて諸人群集

して月と拜を是俗人の是非あり君子是を不習

**草木** 正月草木類 此次そのついで

松の花 異名黄松 若翠 松

△みどり立右つらきも春あけ若こころの黄あけのあり是と松の花

花とつゝ一説は松の花は百年は一度よく目出度りのともいふ

連雲花も糸いかり松乃を(連雲花) 松乃を(連雲花)

狂 半葉なる松のみより毛春らん今下町の菓子ねらひ 正継

哥草庵 頌阿 君位といふもまらうをなれ

新拾 春松久緑 惟家 紫子代とみどりとそとて相生乃

松と君とのゆくを傍りとは新古 松有春色 太政大臣

そへてふれぬも是の味みたり ねみぞ子代乃をいひりれる

玉吟 松色添春

家隆

万代も松のこみらぬ松の松

色いあゆみのまほしうて

同 春松契齡 後鳥羽院

家々のしづめ乃山のねれり

我々のまもまをかり

新續古 庭松春久 左大臣

庭の面小木の松の松の松

姿一不まの松の松の松

詩 採松華

姚合

擬服松華無所學 嵩陽道士

忽相教 松ノミトリヲ服食セシト思ハ

世ニ山中ニヌム道士ニフト出アヒ其

法ヲ思ヒヨラスニナヒウケカリトナリ

今朝試上高枝採不覺傾翻仙

鶴巢 今朝先試ニナラフタルトホリ高キ

枝ノ上ニホリ採ラントセシニオモヒ

カチヌ雀ノ巢ノアル

ヲヒツクリカヘセシトシ

如龍

松ノ木ノ皮ノ中ニ脂アリテ

狀龍ノ如シト抱村子ニアリ

化石

六帖ニ云ク回紇ノ拔河

ニ古ハ康干ト云ノ川ア

リ松ヲ斫テ川ニ投入レテ三年ニ

ナレハ化レテ石トナル世ニ康干石ト云

奉朝言物 十八公 吳ノ固夢ニ腹上

公有尤所 松生ト見テ松字ヲ

別バ十八公ナレバ後十八年ニシテ

官位三公ニ登ラント云フ果シテ其

諡ノ封大夫 秦ノ始皇泰山ニ

如シ 封大夫 秦ノ始皇泰山ニ

ヒシニ松樹ノ下ニ雨ヲサケタマフ

因テ其松ヲ封ジテ五大夫トス

靈岩寺

唐ノ玄奘西域ニ往

ナデ、曰ク吾西ニ去テ佛經ヲ求

本意ヲ達セバ汝西ノ方ニ長ズヘシ

ト云フキテ去リケル後此松西ニ指ス一

年忽チ其枝東ニ向フ弟子等三

テ吾師歸リ来ルベシトテ

迎ヘ待ケル泉ニ玉昇カレシ

松品類

黒松雄松とも  
常の松

赤松雌松とも 葉細柱  
等小用て楠よりをわす

朝鮮松本唐松の葉長く  
色をなして直実と松子と云

五葉の松葉をわす  
みどりかき色あかり

姫小松五葉に  
似て葉をわす

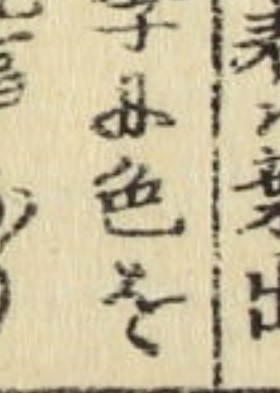
つら木もさきほびて各  
別のもの多く花は用ゆ

駿州富士の辺多くあり故に富士松  
ともよ葉をわす短く青く春の葉出

きて冬に落葉を此松は四季の色を  
るの春の出葉は青く見事あり

夏もあがり秋黄く色つき得もいそ  
冬にゆるりて落葉して雪の降る

とれも枝ふたより  
事ふくしてあり



梅

昔へ本朝花と称するあり  
梅の中世の花とて櫻より先

梅の種類 白梅 紅梅  
江梅 野梅 大梅

行幸梅 花大うして  
豊後梅 軒端梅 深赤

鶯宿梅 八重も一重もあり故事あり  
飛梅 難波梅 白八重中てん人

梅異名 水姿 氷肌 玉瑞 瓊枝 三肌  
土湯 逸民 雪魂 清容 木母 花魁

三疑紫 花儒者 好文木 故 綸音梅  
香敷見草 此花 春告草 白州

連句 梅 梅 梅 梅 梅 梅 梅 梅 梅 梅  
春風のそよ梅 咲白ひるふ 紹巴

梅 梅 梅 梅 梅 梅 梅 梅 梅 梅  
梅 梅 梅 梅 梅 梅 梅 梅 梅 梅

梅 梅 梅 梅 梅 梅 梅 梅 梅 梅  
梅 梅 梅 梅 梅 梅 梅 梅 梅 梅

梅 梅 梅 梅 梅 梅 梅 梅 梅 梅  
梅 梅 梅 梅 梅 梅 梅 梅 梅 梅

梅 梅 梅 梅 梅 梅 梅 梅 梅 梅  
梅 梅 梅 梅 梅 梅 梅 梅 梅 梅

中庭の梅ふきはるるの冬 鬼貫  
伊の松て水は初く新乃梅 後竹  
三味線も小春ものは梅紅を来山

万葉

坂上郎女

妻これのまがき 宿の梅は花  
ひらりるくや春日やうさん

夫木

為相卿

さうてらん新をの梅はくれさみか  
落くやうきと雪の一えと

万葉

家持

みそのおけりききの梅乃花を  
あめはるあうり者とよりえ

家集

西行

梅がさしをころふ吹くさえて  
入るひんより先よころる風

建保百首

定家

梅がやえうつろい 新  
さやまのの花乃かぐえふ

新撰六帖

紅梅

信実

高の梅はうひれさみ乃おろし枝  
糸さすのふのえやうれるん

金葉

尋梅

為道

淡りてし所ののこ七梅の花  
そふともいひはみやひさめん

夫木

春朝梅

家隆

結ぶるあさひの里乃梅まらさ  
やそくら人も袖白より森

新勅

夜梅

前笑白

梅が香もあまらる月ふまへつ  
それとも思へどうはむらうる

夫木

夕梅

為兼

曉の風をまよひてあま乃花  
このゆふをふそゆけそあめ

家集

山辺梅

仲正

よのつひつり本はらじまふの  
梅乃匂ひをたさりのふ

家集

垣根梅

仲正

白心なるを梅をよめま  
垣根乃梅のころるうらり

夫木

家梅始聞

能因

去後トむいもあふいつか  
ふ花室のあまらるみ市州

玉吟 曉梅

家隆

春のちのふわり月夜の梅はむ  
庭も中して雪の明もそく

夫木 道梅

法印定軌

るのふり月星山のうき花はふ  
たらしはなをりま風をよく

白川

梅移水

頭輔

笑日より花のそよそよあは  
梅のうたゆく庭のちり水

家集

湖辺梅

定家

くみそく志賀はたあまのほろと  
雪さそくさう那のあまふり

王集

月前梅

宗尊親王

梅の香はあまの春はさうふて  
若乃たれはくさくさ月をけ

新續古

海辺梅

有親

延喜人のくさくさ梅も白く  
若乃乃まき梅のうたう芳

夫木

野外梅

光俊

あけへのうた梅は花の梅まふ  
ねて乃初布れはくさくさ

詞これさあ。うらね。こそあ。白妙  
笑らる。白く。解く。初まむつらも。  
うつらふ。うつく。一き。公室。あはえ。

志のえ。あはえ。所。谷。園。時。斗。う。  
きの梅。花のうら。路。さうてはる。

作意の垣縁梅。軒。初。梅の梅。初  
の梅え。密雲の梅うえ。ま。と。ら。花

南は花垣。垣板の梅。鷲。本。じ。う。唱  
て梅。ふ。初。風。も。白。く。梅。く。さ。の

ゆ。ふ。さ。梅。は。花。さ。う。初。梅。え。  
と。春。風。白。く。梅。を。梅。く。さ。と。

さ。く。白。く。風。を。月。白。く。梅。を。初。む。  
それ。も。日。の。梅。初。梅。を。初。む。

る。初。日。初。梅。白。く。初。梅。の。梅。雪  
さ。う。初。梅。白。く。初。梅。の。梅。雪  
笑。夜。交。を。初。梅。の。梅。雪。初。梅。の。梅。雪

さ。の。梅。白。く。梅。の。梅。雪。初。梅。の。梅。雪  
と。う。初。梅。の。梅。雪。初。梅。の。梅。雪  
初。梅。の。梅。雪。初。梅。の。梅。雪。初。梅。の。梅。雪  
初。梅。の。梅。雪。初。梅。の。梅。雪。初。梅。の。梅。雪

冬春のちり 梅 不動く。白の梅  
あけて 露とる。雨 梅も白

詩 梅ノ詞 張籍

自愛新梅好 行尋一徑斜

梅ノ花ガカリヲシタヒ 往來心ニカケテ  
小路ヲ横斜ニミカリミチヲタツ子ル

不教人掃石 恐損落來風

ノ石ヲハラフテラカズハ風ニ落松  
シタル葉ヲクミツセシモノヲトナリ

詩 梅ノ詞 唐彦謙

欲寫愁腸愧不才

思ヘトモ身不肖 多情練灑已低  
不サイナルヲハツル

催云ヒズタキコトハカヅクアリア巳ニ詞  
ニイヒイダサントモヨウストナリ

窮郊二月 初離別 故鄉

サヒシクナツカ 獨倚寒村 鷓野梅  
シキトナリ

詠ノ香ヲカイデ 君ヲ思フナリ

詩 梅花七字對句 詩礎

桺條啼色不忍見 無數梅

梅花滿枝空斷腸 點入衣

寒澗渡頭芳艸色 弄綺梅

春梅山嶺上 鷓鴣聲 正調梅

詩 梅花五字對句 同上

梅花交近野 梅靜澄窓影

草色向平地 春明發筆光

梅故事 羅浮夢 隋の趙師雄  
日暮て羅

浮山の松間 酒肆めまろく 沈粧素  
服や美女と語らば 香人を襲ふると

酔臥く朝小起あがり 見まは梅樹

の下にありて酒肆 **梅曆** 山中并  
も美人もさしど 住居

て春の至るとあはれ梅花の影を  
を見て春とあはれとあはれ梅花曆と云

**詩話** 蘇東坡の妹好んで詩を  
作ふと東坡はよきなり

山谷東坡小會して詩を作ると時  
東坡 和風揺細柳澹月映梅交

と作る妹の云く未可あはれ  
大母笑ふ山谷是を見て唱へて

**詩** 和風舞細柳澹月隱梅花  
と作るに妹見て必し可くと

と東坡山谷の兩人妹ふむらふ  
汝ら句いふと問ふ妹詩と即時作

**詩** 和風扶細柳澹月失梅花と  
作りあはれ二人も大感と云

**好文木** 晋の袁帝書とよむ時ふ  
四時よむ梅の花開き

たけとつる故ふ好大木と異名  
梅譜の梅の花の儒者といふ

**節分草** 花は白花して一莖ふ  
まぐさ咲く寒中より

葉と出し立春の頃さく多し故  
と節分草といふに俳諧節

分十二月の季ゆへ是も名  
よむ十二月とさるは所存と云

**土筆** 筆つたふ南方の諸州  
生る形筆乃如高三寸

**福壽州** 元日小花さくゆへ  
元日州とも云ふなり

**詞** 春の唄ありて若水今朝長雨  
能く保路の若い梅の影を風斯

狂咲かふる梅の去歌のゆへなる  
福寿さくさく咲かぬけしを京都

**詩** 福壽州 亭對句 同上

**淑氣煙相喜 瑞凝三秀州**

**風光草尚榮 春入万季秋**

詩 福壽草七字對句

詩 健

豈知玉殿生三秀

瑞色鮮

詎有銅池出五雲

動三辰

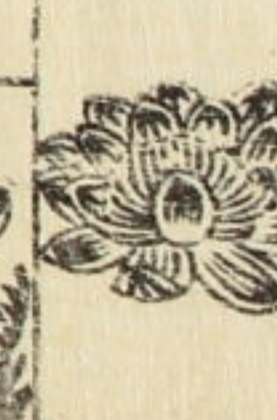
草芽半吐參差碧

知春歸

花蕊初開淺淡紅

嬌朝花

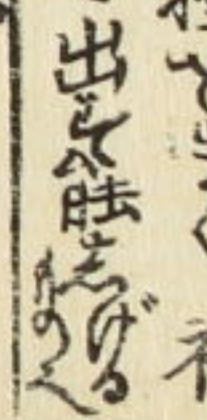
淺黃福壽草二重大



白黃之淺黃見後自



八重福壽草八重とくも



聖粟新葉

九月ふ種とましく初

若草

新草初草○初

春小生とる草の惣名之

家集 為家

春日野のみひよりまにつあがれて

たぢもとるまびわさる春約

詞 けりたさきと。あはれの居りあふさ。

みわあま。けりあはれさき。あはれさき。

あはれさき。あはれさき。あはれさき。

あはれさき。あはれさき。あはれさき。

あはれさき。あはれさき。あはれさき。

あはれさき。あはれさき。あはれさき。

あはれさき。あはれさき。あはれさき。

あはれさき。あはれさき。あはれさき。

あはれさき。あはれさき。あはれさき。



河梁馬首隨春草 春州深

江路猿声愁暮天 百草生

曲江春草 鄭谷

花落江隄族暖烟 餘州色遠

相連 春雨ノスカリニ草 香輪莫輾

青々破留與遊人一醉眠 青

青タル草ノ上ニ車ヲキレセ草ヲヤ

フリソコナフコナカレ野遊ノ人々ニ

トメテキアタヘントナリ

詩 同 唐羅鄴

芳草和煙暖更香 閑門要路

一時生 芳草ハヒロカリテ隱年

點簡人間事 惟有春風不

世情 世間ニスノバ年々世話

下萌 冬かきこる草の春の出

發の氣のよして下まき出

外面の庭をよめ日教え園

新草今や茂るも抑りへんす日

地とてまき日ひまうせうあ

木芽立 △木の芽 △木の芽のや

馬の木の芽かき女羅 木芽漬

非 陸奥のまま 鶏垢 合の糸

薬 草木のきりかぎり芽と生

かへといへば春の季ありの一

説ふいこむとをうりい季あり

春の艸の芽の春の季といひ

秋の艸の芽の秋の季といひ

水菜 △水入菜もいりり京都近

邊より生さるは

**薑** 蔓青の苗を薑子 本草心 苗を食ひ初夏から心と 食ふとんと薑子といふ

**非** くくちや西家の 爲菜苗二 けしてあまて春翠

**路薑** 冬花の考 云云 非苗の考

**田すく** 田すく 田すく 田すく

**野大根** 野大根 野大根 野大根

**生類** 正月の部ありといふ

**猫の妻** 猫 二月とある書も 社 ねども年越

前後より戀ひ初るあり春秋 二度さる春の牡牝を喚び秋の 牝牡を喚んで乳で子を生とす きて寒氣といやがるもの也秋子の

多く産むが下り孕て六十日して 産じ生きて七日にて眼をひきき

飯とく二月半まで遊ばし目百 目さう有て乳をさるてもよく

その鼻の尖つひ冷る夏至 五月一日さう煖かり鼠を食ふ

上旬より頭より下旬より尾より 食ふ猫の眼まで時刻とある哥

六ツ圓く丸八王子の四ツ七ツ 林の雲 あり九ツの針産む唐糸の竹嶋猫

の二種あり 茶まき首末まき

といわくこの糸をけりけり といわくこの糸をけりけり

といわくこの糸をけりけり といわくこの糸をけりけり

といわくこの糸をけりけり といわくこの糸をけりけり

といわくこの糸をけりけり といわくこの糸をけりけり

といわくこの糸をけりけり といわくこの糸をけりけり

といわくこの糸をけりけり といわくこの糸をけりけり

此飛ねりありあつひ生葱を鼻のうらみ入きを捕たらしまし尿守

**白魚** 異名鱧残魚といふ目指所

夫木のころちり 宗尊親王

白魚の清し丹内ふりてを代と治むへきまろしりたり

**朝鷹** 鳥鳴鳥がり

すごこさ 右昔春の季貞徳の説

説ふ是の宵に雉のなき所を

鳥狩ともさくすへ鳥とも朝

鷹がりともしつありともこ

うに竹あくの枝と守事

**詞狩人** 鳥を射る人

新子。ゆり。若てある。神の春風。茶  
梅。ふる。目。花のうら。春の時分は。  
くす。神の風。鷹はる。

**白** 一條帝の御時源

**繼尾鷹** 鷹の頼政鷹尾

鶴のこまをくはて白く羽て

見て山へる心かきしめんとて

ちう尾へくへ尾が **鷹** 鷹

源頼政 **佐保姫鷹** 春鷹

鷹の雛鳥と佐保姫鷹 云説

**鳥** 鳥の尾とりの

非 鶻も括りけ 浅刺 大さき  
さうさうの野 蛙夕 浅刺 大さき

の如くはて色ハをみ不同  
事入りしひかりして美なり

飯 鮓 (異名) 鱒魚 正二月の内盛  
小出るりのさうたこの

肉 野 春の諸艸生 出故駒  
野とあれし草と

春 駒 野とあれし草と  
野とあれし草と

喰ふなり。諸家小養ひ  
う馬も初春ふりし草と

野とあれし草と  
野とあれし草と

識 春駒とつへ 初春の春  
駒舞ともは春駒舞のこ

初春の部ふりし  
春駒。春駒舞のさうろを

らんぐよみあふ屋  
非 長約のさうろを

必用

北都へ正月一ヶ月の天  
氣の見え其外必用の事との

破	暮六ツ	夜五ツ	夜四ツ
軍	刃の方	寅の方	卯の方
星	夜九ツ	夜八ツ	夜七ツ
向	辰の方	巳の方	午の方
方	朝六ツ	朝五ツ	昼四ツ
角	未の方	申の方	酉の方
	昼九ツ	昼八ツ	昼七ツ
	戌の方	亥の方	子の方

右の如く正月酉の刻 詠 破軍の  
劍鋒 世の方ふ向ふ戌の刻 破

寅の方ふ向ふ亥の刻 辰の方  
小向ふ次第ふ順ふ一時宛このり

酉の時より 操出と事ハ星ハ夜と  
主さうゆへ暮六ツ時より出初る

破軍のさうろ向ふ方へむい合  
ありて 辨論又何事ふても

万事利ありし是天地の氣合の  
應むる處をいし能くはむべ

○三才圖會 昔唐虞の世ハ正  
月酉の刻ハ破軍星寅の方へ向



雨も米價亦貴し。○甲乙の日雨  
 小室の春中雨多し。丙丁の日雨ふ  
 冬夏雨多し。○庚辛日雨ふ  
 冬雨多し。○今月中雨ふ  
 秋不至し。○日刻 万事刻限を定  
 出水あり。○日寅の刻。廿の日丑の刻。万の  
 事とどろふ用也。○守利の事。○  
**出行作事** 正月の天道南ふ  
 まし出行き。南の**樂事**と  
 方に向ふて吉なり。○  
 おり新と迎へ。一夜のあはれ  
 明行空も。○小替ぬ。○  
 けく日光も美し。くして父母ふ喜  
 親族相識。互ふ賀し。心丸う  
 き立勇し。梅の色香諸木み  
 勝る。鶯の声の若や糸楸  
 薄く霞ある。遠山のあき  
 何れ長閑けり。○

正月飲食 料理献立

禁猪肉は月々六神狐換。○ 物々へは魚は推持成生。○ ○梨栗	まは食好 まはあやまのこのと食 べうは物 まはあやまのこのと食	料理 白うと 小名たきた 青葉	細白や かひりか かひりか かひりか	かき たのり たのり たのり	佳き 佳き 佳き	鱈 鱈 鱈	鰯 鰯 鰯	鰯 鰯 鰯	鰯 鰯 鰯
-------------------------------------	------------------------------------------	--------------------------	-----------------------------	-------------------------	----------------	-------------	-------------	-------------	-------------







精進料理

膾

別名

大いん

鱈

うしこ 大いん

うしこ 大いん

うしこ 大いん

うしこ 大いん

うしこ 大いん

うしこ 大いん

うしこ 大いん

うしこ 大いん

うしこ 大いん

うしこ 大いん

煮物

煮物

煮物

煮物

煮物

煮物

煮物

煮物

煮物

和物

和物

和物

和物

和物

和物



